



# Anchor アンカー

神はそうぞうしいこの世界の上に  
王として君臨なさっている。  
神の目には万事が一目瞭然としており、  
偉大なる、静寂な永遠のかなたから  
最善と見られるところを命令されるのである。

ミニストリー・オブ・ヒーリング 391

## INSIDE

- ニュースウォッチ 3  
キリストはいつから仲保者としての  
働きを開始したのか 16  
異邦人の時が満ちるとは 20  
偶像は神ではありません 29  
秋セミナーのお知らせ 34

61号  
2018年8月





気象庁は、西日本を中心に広い範囲で甚大な被害をもたらした今回の豪雨を「平成30年7月豪雨」と名付けた。…死者は13府県で216人に上っている。安否不明者は27人という。

2011年(平成23年)3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による40.1mにも上る巨大な津波は、日本内外の人々に恐怖と不安をもたらした。

次々起こる自然災害、戦争、政治界、経済界、社会の異常さにただ驚き、ため息をつくばかりである。

「神の抑制のみたまはいま世からとり去られつつある。暴風、嵐、火事、洪水、海陸の災害が次々と急速に起こっている。科学はこれらのすべてを説明しようと試みる。われわれの周囲に頻繁に起こっているしるしは、神のみ子の来臨が近づいた事を告げているのであるが、それは真の原因よりも他のせいになっている。…だが神が天使たちに風をゆるめるようにお命じになると、描写することのできないような争闘の光景が現われるのである」クリスチャンの奉仕70。

科学的にいろいろ分析して次の災害に対応しようと懸命になっている。が、どんなに科学的技術を駆使してもさらに大きな被害が頻発する。聖書の預言に目を向け、最大規模の事件に備えることをまじめに考えなければならない時になった。

由木康の讚美歌241番のメッセージに耳を傾けるときではなかろうか。世も、キリスト教会も墮落している。「さはあれ神に選ばれたる民」よ目覚めよ、そして聖霊が「せきとめられし河の水」のように下るのを祈り求めるように訴えておられる。すばらしい讚美歌伝道者が日本にもいた。



アメリカにトランプ雲発生

ソドム化する世界、同性婚の合法化、指導者のセクハラ(ハラスメントの「〇〇ハラ=嫌がらせ」という言葉が40もあるという)、世界に吹き荒れているトランプ旋風、温暖化現象による気候変動と自然災害、世界指導者の独裁化現象、…。

世界を魅了したあの大伝道者が死去した。今回は、特にビリー・グラハムがキリスト教会のエキュメニカル(一致運動)、アメリカ歴代大統領、政治界に及ぼした影響を取り上げてみた。

史上初の米朝首脳会談の融和ムードに喜んだものの不安は消えない。中国、ロシアの関わりがどこへ向かっていくのか政治、軍事評論家の推論がいろいろある。核にまつわる問題、時速1万キロを超えるマッハ10極超音速で飛ぶとされるロシア軍の新型ミサイル発射実験が成功したと発表されると、米国空軍は緊急に対応すべきであるとかまえている。

トランプ米大統領は1日、ホワイトハウスでの軍関係の行事で演説し「宇宙軍について真剣に検討している」と述べ、既存の陸軍などに加えて、宇宙軍を新設する構想への意欲を表明したとも言われている。<https://www.oricon.co.jp/article/451525/>

トランプのエルサレム首都移転宣言も預言的な意味があると思う。各国の反応、特にイスラム勢力はどうなっていくのか、預言の研究を深めていきたいものである。

1844年以来、再臨待望者は時の延長に疲労している。「時は延びた、幻は空しくなった」ということわざに解決はあるのか。この地球の悲惨に泣いておられるお方がいる。今も十字架の苦痛は続いている(教育311)。我々は自分たちの苦痛から目を離してもっと高度な信仰の持ち方が要求されている。かつてのSDA世界総会総理のロバート・ピアソンは、ダニエル9章のダニエルの祈りは世界総会役員らの祈りでなければならないと言われたことがあった。

「われわれは、あなたに向かって罪を犯した、律法を行わなかった、み声に従わなかった、背いたために、恥はわれわれのもの、あわれみとゆるしは主のもの」

「それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください」(ダニエル9:17)。

サンライズミニストリー代表 金城重博





# PROPHETIC 預言的 NEWS WATCH 時事ニュース

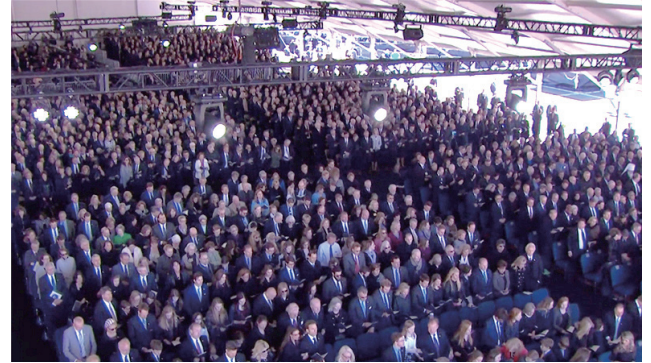
## 世紀の大伝道者、 ビリー・グラハム師死去



一般のメディアも彼を 20 世紀の世界伝道者と称賛した。

「使徒パウロ以来の大伝道者」ビリー・グラハム氏召天、各界から賛辞と惜しむ声

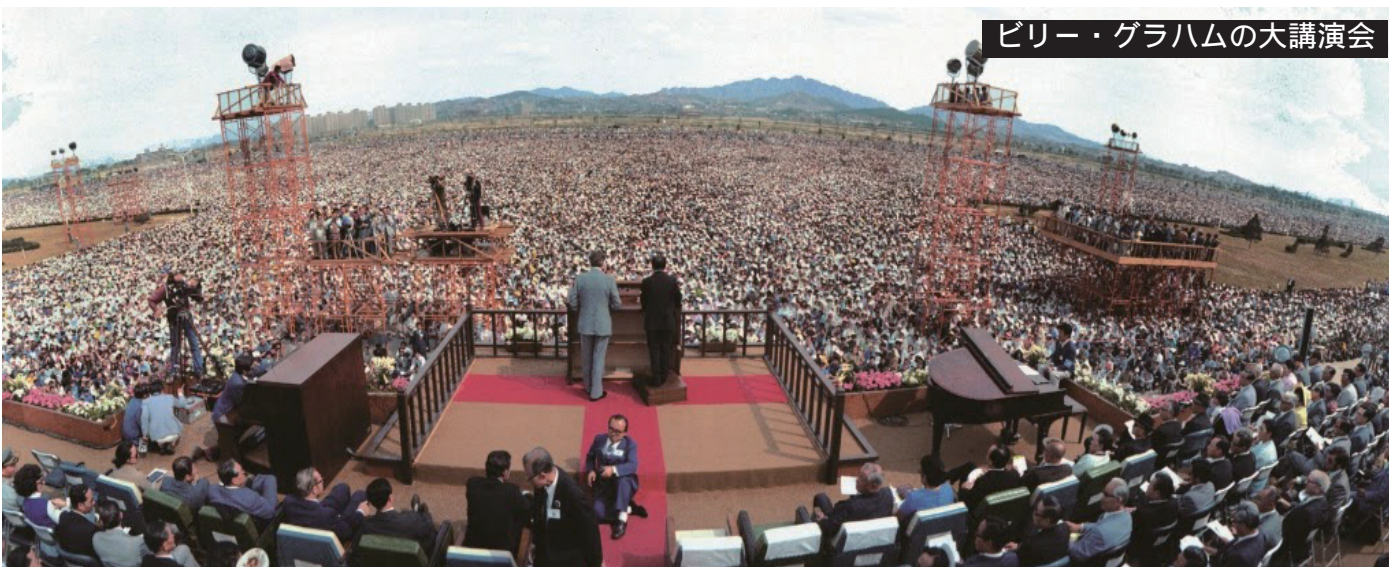
世界 185 の国と地域で、2 億 1 5 0 0 万人に福音を伝えた世紀の大伝道者、ビリー・グラハム氏が 2 1 日朝、9 9 歳で召天した。この知らせを受け、キリスト教界はもとより政界や財界など、各界からその偉業をたたえる声が寄せられるとともに、「使徒パウロ以来の大伝道者」がこの世を去ったとして、惜しむ声もある。2018 年 2 月 22 日 Christianity Today より。



### 葬儀に世界から 2 千人、米大統領らも出席

※メディアも、一般キリスト教会も「召天」という表現をするが、それは聖書的でない。聖書は一貫して、

人が死んだら、キリスト再臨の時に復活するまで、無意識の眠りにつくと教えている（伝道 9:5,6；1 コリント 15:51-55；1 テサロニケ 4:13-17）。



ビリー・グラハムの大講演会



ビリー・グラハム師の遺体が28日、首都ワシントンにある議会議事堂の大広間で公開安置された。トランプ大統領夫妻やペンス副大統領、閣僚、議会指導部らが立ち会い、歴代大統領の「精神的導師」を務めたグラハム師の影響力の大きさを示した。議会に民間人4人目の公開安置。

「日本では1956年、1967年、1980年、1994年の4回にわたってビリー・グラハム国際大会が開催された。」

ビリー・グラハムは、キリスト教根本主義の中から生まれた運動の代表的な人物であるが、狭義の根本主義と福音派は別の運動になり、新しい運動は新福音主義として知られている。彼は新しい福音主義の父(Father of New Evangelicalism)と呼ばれた。

「1950年代から超教派的になり、エキュメニカル(教会一致運動)へと動いていく。『私は招かれるところ、キリストの福音を説くためにはどこへでも行く』」ウィキペディア。

「1950年に『ビリー・グラハム福音伝道協会』を設立した。20世紀中ごろのリバイバル運動(信仰復興運動) 聖霊運動の主力となった一人である。今まで生きた誰よりも多く世界中の人々に福音を語ったといわれる」ウィキペディア。

「ペンテコステ派-カリスマ運動との壁をぶち壊したのもビリー・グラハムであった。1962年にFGBMFI(フルゴスペル・ビジネスマンズ・フェロシップ・インターナショナル、国際フルゴスペル実業家親交会シアトル)の講演で、カリスマ一致運動を称賛した。」Evangelicalism and the Charismatic Movement 2012.



ローマ・カトリック教会と世界キリスト教協議会(WCC)を一つにする大きな役割を果たした。「主要な教理で一致」することを促した。

「『それはポテトつぶし器—Potato masher』、神がキリストチャンをミックスして、つぶして一つにするという表現である。」ビリー・グラハム伝道連盟、Decision, 10-1974。

「グラハム氏は米国のイエズス会の友である」 ザ・

カトリック・ヘラルド 1966年6月3日。

グラハム氏は、ローマ・カトリックのベルモント・カレッジにて博士号を取得(1967)。グラハム氏は聴衆に向かって「この大学の福音は、私が説いている福音と同じものである」と述べた。Smokescreens, 56. Chick Publication.



それ以来、グラハム氏はローマと40年間親交を持つようになった。

「ローマ法王ヨハネ・パウロ2世はほとんど2時間、世界の最もよく知られたプロテスタントの伝道者、ビリー・グラハムと密談した」。Rome and American Evangelicals Religious News Service (1981)。

法王は「我々は兄弟である」と個人的に話したそうだ。

「ビリー・グラハムはオーソドックス(正統派)だ。彼は、カトリックと異なるものは何もない。私は道徳について言っているのではなく、教理のことを言っているのである」。カトリック・ダイジェスト、7-1972。

「彼は、ロナルド・レーガン大統領の時に、初めてバチカンにクラーク氏を大使として送ることについて、道徳多数派(moral majority)のジェリー・フォルウエル、その他クリスチャン・ブロードキャストिंगの指導者、パット・ロバートソンとも相談した」。

レーガン以来、歴代大統領とビリー・グラハムとの関係はますます密になった。

そして、「アメリカを偉大な国に」というスローガンのもとに異例な人、トランプが現れる。

「政教分離の壁を取り壊すために多くのことをやった人物が、今日、彼のノースカロライナの家で死去し





た」。 <https://ffrf.org/news/news-releases/item/31792-long-time-ffrf-foe-and-state-church-opponent-billy-graham-dies> FFRF (Freedom From Religion Foundation)

### セブンスデー・アドベンチストでさえ、ビリー・グラハムに魅惑された。

日本三育学院のある教授も、両国国技館で開かれたグラハム師の大講演会に神学生を多数引き連れて行き、感動して帰ってきたことを覚えている。「彼は、バプテスマのヨハネだ。証の書を全部読んでいる」と聞かされたことを思い出す。

「今や、古い否定的なアプローチ、つまり他の教会のグループと異なる点を主張するやり方は、過去のものとなった。確実に過去になった。そうあるべきである」 Ministry3-1966、レローイ・E・フルーム。

ジェリー・フォルウエル、パット・ロバートソン、グラハム師の息子のフランクリン、その他多くの福音派キリスト教会は、アメリカを古き、良きアメリカに立ち返らせることを訴え続けている。

「我々の国は、全能者なる神から離れて墮落している。…もしクリスチャンが一致したら、我々はどんなことでもできる。我々は法案、あるいは修正案でも通すことができる。それが我々のやろうとしていることだ」 Ministry, December 1979. (Director of Christian Voice, U.S.A.-Robert Grant に引用。

「ポテト マッシャー」とは実に、黙示録 13 章と大争闘下 165 ページに預言されて



いたことが目の前に成就していることを表現しているではないか。

### エキュメニカル(キリスト教一致運動)に多大な貢献!

すべての教会の教理的な相違をわきに置いて、教会一致運動に集中するようになった。超教派の大講演会(クルセード)に改心者を各教派に振り当てるとき、最前席には、カトリックの聖職者たちが席をとっていたと言われている。

「米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるそのときに、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反対者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである」大争闘下 165。

キリスト教福音派が強力にトランプを支持しているために、彼の行動に抗議する大衆がいても支持率は下がらないのである。オバマ大統領のときの副大統領はバイデンでイエズス会であった。下院議長はジョン・ペイナーでカトリックであった。フランシス法王が米国会で演説をした時、「この時を 20 年間待っていた」と公の前で涙を抑えきれずハンカチで目を拭くほど感情をあらわにしたのは彼であった。

今の米副大統領は、マイク・ペンス氏。彼は、キリスト教右派であり、エバンジェリカル・カトリックを自称する。マイク・ペンス氏については、次のような記事があった:





アメリカの政治関係者の間では、何らかの事情でトランプ大統領が退任した場合の「ポスト・トランプ」の状況が既に語られ始めている。「トランプ後」の最大の焦点が、副大統領であるマイク・ペンス氏の動向だ。政治経験豊かなペンス氏が大統領になった場合、政権運営はトランプ氏よりも緻密で堅実なため、歓迎する声も多いが、一方で、リベラル派にとっては「トランプ以上の脅威になる」という声が圧倒的だ。 <https://synodos.jp/international/20538>



め、歓迎する声も多いが、一方で、リベラル派にとっては「トランプ以上の脅威になる」という声が圧倒的だ。 <https://synodos.jp/international/20538>



ベイナーの後に下院議長となったのはポール・ライアン議長。彼もカトリックだ。今度の中間選挙に出馬しないと辞任を発表したが、ライアンはカトリックのチャプレン(下院議会付の牧師)に辞職することを強いたことがあった。すると議会に反発があり、どう

いうことが起きたのか分からないが、数週間後に、カトリックのチャプレンは自身の辞職を無効にし、ライアンを辞任させた。それから、ライアンは「アメリカはカトリックを必要とする」という陳述をした。

神の僕 E.G. ホワイトは次のように言っている：

「合衆国の新教徒は、率先して、心霊術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべる。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじるのである」(大争闘下 350)。

※(心霊術はたしかに今ではその外形を変え、不都合な点を隠して、キリスト教の装いをとっている。大



争闘下 312)

アメリカの国会の要人は、カトリックのイエズス会によって占められているという。不思議ではないか。黙示録 13 章の預言がプロテスタントの国、アメリカにおいて確実に成就していることを垣間見ることができる。

アメリカのキリスト教会に最も影響を及ぼしたのは、故ビリー・グラハム師であり、政教分離の壁をぶち壊すような影響を政治界に与えてきたことが分かる。

トランプ大統領の異例な、非常識的な言動から、この人の時に日曜休業令が発布されるかもしれないという人もいる。あり得る世界情勢である。しかし、「弾劾(だんがい)、(罷免(ひめん))」になるかもしれないと推測する人もいる。もし、弾劾ということがあっても、ある記事は次のように述べている：

「トランプ大統領は政権発足後の今年 5 月、宗教保守への『恩返し』として、上述の宗教団体の政治活動の禁止を緩和する大統領令を発した。選挙などでキリスト教会を基盤にして、妊娠中絶禁止や同性婚禁止を訴える候補を支持しやすい土壌づくりができていく。

トランプ氏の宗教保守としての顔は作り物かもしれない。しかし、その仮面をとると、『本当の顔』であるペンス氏が登場する、としたら、ペンス氏が大統領になるのは宗教保守層にとっては、願ってもない機会である。

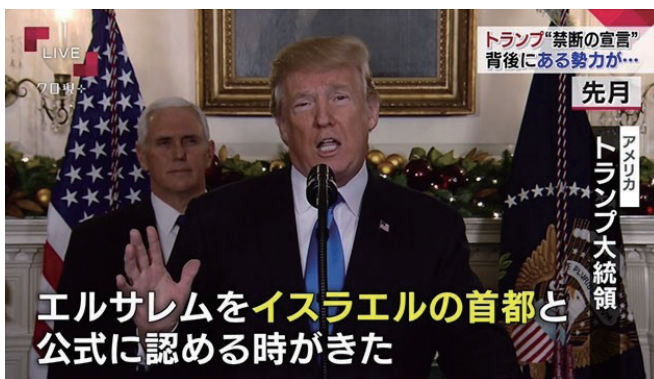
『トランプ大統領なんてとんでもない』と思って弾劾のプロセスが進んでも、その向こう側にガチガチの宗教保守であるペンス氏が大統領になってしまう、という構造はリベラル派にとっては極めて悩ましい。もし、弾劾や辞任がなくとも、次の 2020 年の大統領選挙に現職のトランプ大統領が不出馬の場合、共和党予



備選でペンス氏が勝ち上がっていく可能性もかなりある。今のところ、ペンス氏本人は否定しているものの、すでに選挙に向けての組織づくりを始めているという報道もある」。

大統領に何かあった場合、次に大統領になるのは必然的に副大統領である。副大統領が事故死したりすると、次に大統領の座につくのは、下院議長である。これがアメリカ政治の仕組みである。いずれにしても、預言されているアメリカの憲法改正一日曜休業令は非常に近いのではないだろうか。

## トランプ米大統領はイスラエルの首都をエルサレムに移転と宣言



2017年12月7日、ドナルド・トランプ米大統領は、エルサレムをイスラエルの首都として正式に認めると発表し、米国の歴代政権が継続してきた政策を転換した。「北朝鮮問題も吹っ飛ぶトランプの大暴挙」と呼んでいる記事もある。

古代からの長い歴史があるエルサレムの地位は、イスラエルとパレスチナが最も激しく対立する問題の一つ。イスラエルは発表を「歴史的」だと歓迎したが、国際社会からは強く非難する声が出ている。<http://www.bbc.com/japanese/42261585>



米務省のナウアート報道官は23日、イスラエルの米国大使館を今年5月に現在のテルアビブからエルサレムに移転するとの声明を発表した。トランプ政権はエルサレムをイスラエルの首都と認定し、ペンス副大統領が来年末までに移転すると述べていたのを大幅に前倒しした。

## 欧米の反応



米国の決定に賛成できないと表明している国々もある。フランスのマクロン大統領も、ドイツのメルケル首相も、イギリスのメイ首相も…

パレスチナだけでなく、イスラム諸国が強く反発しているのは言うまでもない。

ドイツのシグマール・ガブリエル外相は、大使館の移転でさらなる衝突を生み出し、「極めて危機的な状況が加速するだろう」と語った。

「レッドライン（一線）を越えた」トルコのエルドアン大統領は同日、米国がエルサレムをイスラエルの首都と認定することはイスラム教徒にとって「レッドライン（越えてはならない一線）」だとし、認定すればイスラエルと断交する可能性を示唆した。<http://www.sankei.com/world/news/171206/wor1712060003-n1.html>

国連のアントニオ・グテレス事務総長も「強い懸念」を示し、「2国家共存構想以外に選択肢はない。代替案はない」と述べた。この問題は、イスラエルとパレスチナの二国間の問題であって、アメリカに介入される理由はないと言っているのである。

## イスラム諸国の反応

トランプ大統領も、ティラーソン国務長官や諸外国の首脳から「エルサレムを首都と認めることは、イスラム教過激派のテロに油を注ぐようなものだ」と警告を受けていた。

イランの最高指導者アリ・ハメネイ師は、大使館の移転は、アメリカが中東政策を行う「資格がないこと、



そして失敗していることの象徴だ」と批判した。イランのハッサン・ロウハニ大統領も6日、「今回の決定は、新たな危機を呼び起こす傲慢で、シオニズム（ユダヤ人の民族国家をパレスチナに樹立することを目指した運動）的な行いだ」と述べた。

サウジアラビアのサルマーン国王は、「世界中のイスラム教徒に対するあからさまな挑発になる」と語っている。

イスラム主義を掲げるパレスチナの政党ハマースは、トランプの発表によって、中東地域での米国施設にとって「地獄が始まる」と述べている。

イランの最高指導者ハーメネイーは公式ツイッターに掲載した声明で、米国の決定は「絶望と衰弱」から生じたと述べ、「パレスチナは解放される。パレスチナ国家は勝利を遂げる」と述べた。

## バチカンとはいうと：

ローマ法王フランシスコは6日、バチカンで演説し、「エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地がある随一の街だ。私はこの数日間の状況に強い懸念をもっている。エルサレムの現状を尊重すべきと、あらゆる人たちに呼びかけたい」と述べた。

とはいうものの今後どんなパフォーマンスをするだろうか。

ダニエル 11:40 「南の王(ネゲブ)」ーイスラム諸国は、「北の王=法王教」に戦いを挑むという預言がどのように展開されていくだろうか。この戦いが展開されると、世界は「つむじ風のように」「新世界秩序」構築に加速するであろう。

## 最も影響力のある組織がトランプを支持している：

### 共和党ユダヤ人連合の支持

アデルソン氏が資金を提供していた影響力のあるロビー団体である共和党ユダヤ人連合の支持も得ている。



福音派の団体 副代表 デビッド・パーソンズ：

「私たちは神がユダヤ人を愛していると気付

いたのです。神はユダヤ人を約束の地に戻したのです。聖書に書かれていることを守らなければならず、神の教えに逆らうわけにはいきません。」 <https://www.nhk.or.jp/kokusaihoudou/archive/2017/12/1221.html>

### キリスト教福音諮問委員会

「なぜ、トランプ大統領は今回の判断に踏み切ったのか。

重要な要因の1つとして注目されているのが、アメリカで最大の宗教勢力とも呼ばれる『キリスト教福音派』の存在です」。

信仰と自由の創始者、ラルフ・リードのような保守的な福音派、福音諮問委員会も強力な支持を与えている。 <https://www.apnews.com/bd3ffb06828b4f77a2d4dfd6e62d8940>

しかし、福音派とは言っても賛成一色というわけではない。

福音主義者は、聖書を文字通り「聖なる書物」だと信じている。

主は、アブラム（ユダヤ人の祖先）と契約を結んで、こう言った。「私はこの地（現在のイスラエルに相当する地域）をあなたの子孫に与える」と（創 15:18）。彼らはエゼキエル 36 章から 39 章まで字義通り、離散したイスラエル人が聖地エルサレムに再び集められ、第三ソロモン神殿が建てられると信じている。

### 米最大のイスラエル支持団体

クリスチャンズ・ユナイテッド・フォー・イスラエル（CUI）の指導者、ジョン・ハギー氏（コーナーストーン教会牧師）は米FOXニュースに対し、「（トランプ氏の名は）歴史に刻まれるだろう。なぜなら、イスラエルを他国と同等に取り扱う勇断を下したからだ」と語った。

### 米国カトリック教会

米国のカトリック教会はコメントを控える一方、ローマ教皇フランシスコは、米国の福音派とは相反する反応を示した。

1840年代からアメリカ人のパレスチナへの憧憬（どうけい）(あこがれ)は、イエス・キリストの再臨の前提条件としてユダヤ人が約束の地で再興する必要があるという「ユダヤ人復興主義」によって培われてきた。



一九世紀末にシオニズム運動が勃興するとキリスト教シオニズムと呼ばれるようになり、キリスト教徒がシオニズムを支持するような潮流が形成される。この潮流が息子ブッシュ政権時代に「宗教右派」と呼ばれた政治勢力であり、エヴァンジェリカル（福音派）のキリスト教徒である。キリスト教根本主義（原理主義）者とも呼ばれた。

キリストの再臨と世界の終末が起こる前に、ユダヤ教徒がシオンの丘（エルサレム）に帰る必要があるとする考え方なのである。

**サンヒドリンは、トランプ、プーチン両大統領に第三ソロモン神殿建造を要請？**

「トランプ氏が大統領選で勝利した直後に、彼は2、3千年前から活動休止中のサンヒドリンと連絡を取ったのは当然の行為です。サンヒドリンは、今こそ、シオニスト配下のイスラエルに第三の神殿を建造するよう呼び掛けています。…サンヒドリンは、ロシアのプーチン大統領とトランプ次期大統領に対し、米ロ共に力を結集し、聖書の命令通りの役割を果たすべくエルサレムにユダヤ神殿を建造するよう要請しました」。

サンヒドリンの報道官であるラビのヒレル・ウェイス氏は、Breaking Israel News に次の内容を伝えました。

「トランプ次期大統領（彼は、エルサレムはイスラエルの首都であることを認めている）とプーチン大統領（彼は第三神殿の建造を自らが望んでいる）に対して、イスラエルと第三神殿の重要性を認識していたクロス大王のように、非ユダヤ人の2人のリーダーには共に協力して第三神殿の建造に動いてほしいことを、ユダヤ法廷を通して伝えた」と。<https://blog.goo.ne.jp/yori+issouno/e/83673676aa6402dfbad0e9681970ca58>

**なぜトランプは、エルサレム首都宣言をしたのか？**



トランプ大統領がエルサレム首都宣言をした背景：

なぜ、トランプ大統領は何の前触れもなく、世界情勢も無視して、こんな「首都」宣言をしたのだろうか。

トランプがイスラエルの首都をエルサレムに移転すると宣言した真の理由は、福音派の支持者の票を恐れていることであったという記事がいくつもある：



「研究によると、アメリカに聖書の預言を文字通りの真理として確信している5千万人以上の福音主義信奉者がいる。最近の調査によると、白人の福音主義信奉者の82パーセント、アメリカのユダヤ人の40パーセントが、神はユダヤ人にイスラエルを与えたと信じているということが分かった」。<https://www.independent.co.uk/voices/jerusalem-donald-trump-israel-capital-decision-reason-why-evangelical-voters-us-fear-a8099321.html>

「どうやら、そこには、トランプの支持基盤となっている宗教保守、キリスト教原理主義 (Christian Fundamentalism)、通称、福音派 (Evangelicalism) の強い動きがあったようだ。このアメリカの政治と極右宗教=キリスト教福音派との結びつきを次のようにたとえている人がいた：

「こうした極右宗教と政治の結びつきは、『日本会議』や『神道政治連盟』などといった宗教的極右団体と政権とが結束している現在の日本の政治とシンクロした動きといってもいいでしょう。トランプ大統領のエルサレム“首都”宣言。背景にアメリカ最大の宗教勢力『キリスト教福音派』の要望がありました」。<http://sophist.hatenablog.com/entry/2018/02/26/070441>

**人口の4分の1を占めるといわれるキリスト教福音派とは？**

福音派の83%が、トランプ氏に投票したと言われている。彼らは、旧約聖書の預言、特にエゼキエル書36章～39章の預言を字義通り信じている。字義通りのエルサレム、字義通りのイスラエル、字義通りのハルマゲドンの戦い…。





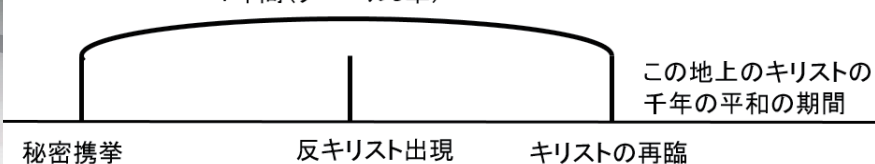
エゼキエル 36:24-26; 36:24  
 「わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く」。

37:21、22「あなたは彼らに言え。主なる神は、こう言われる、見よ、わたしはイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めて、その地にみちびき、その地で彼らを一つの民となしてイスラエルの山々におらせ、ひとりの王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に分れない」。

### 福音派は、次のようなことを信じている：

- ① ローマ帝国によって滅ぼされたユダヤ人の国イスラエルが再建され、世界に散っていたユダヤ人が再び集まってくる。
- ② イスラエルは強大になり、ユダヤ人が神から授かったと聖書にあるユーフラテス川からナイル川までの「約束の地」を領土として持つようになる。
- ③ 現在イスラム教の「岩のドーム」と「アルアクサ・モスク」があるエルサレムの「神殿の丘」に、ユダヤ教の神殿（第三神殿）が建てられる（モスクと岩のドームは破壊される）。
- ④ その間に反キリスト教の勢力が結集し、イスラエルとの最終戦争になる。その際、全世界の王（指導者、軍隊）がイスラエルの「メギドの丘」（ハル・メギド、ヘブライ語で「ハルマゲドン」）に召集される（メギドはイスラエル北部のハイファ近くの地名）。
- ⑤ 最終戦争でイスラエルが滅びそうになったとき、イエス・キリストが再びこの世に現れる。かつてイエスを信じず十字架にかけさせたユダヤ人は、今やイエスを救世主と認めてキリスト教に改宗し、信者にならなかった異教徒

7年間(ダニエル9章)



- ・キリストの福音派はエルサレムに神殿建設を期待
- ・反キリストが神殿に座す(2テサロニケ2:4)
- ・それから3年半の大患難の時代
- ・キリスト再臨後、千年期この地上を支配される

は焼き殺される。その後、1,000年間の至福の時代が来る。

しかし、聖書の千年期は、キリスト再臨の後に天に千年間、復活した聖徒たちはキリストと支配し、裁くことが黙示録 20 章に書いてある。この地上に平和があるのではない。上記の7年間というのはダニエル 9:26-27 からとられたようであるが、それは 70 週の預言がユダヤ人とエルサレムの町とメシアに関する預言であり、すでに確実に過去に成就したことであって、最後の 1 週 = 7 年間で終末時代に適用するのは全く聖書の根拠はない。

### キリスト教原理派—福音派の字義通りの教えは、聖書的ではないことを記しておきたい：

#### 1. イスラエルほど神に寵愛された民族はいない。

神は彼らを「宝の民とされた」(申命記 7:6)。「目の瞳」のように愛された。「律法の保管者」とされた。あらゆる特権と祝福が約束されていた(申命記 28 章、4:9)。しかし、それは条件付きであった。神に対する愛による服従であった。シナイ山以来、どれほど背教を繰り返したか。それでも主は「その先祖の神、主はその民と、すみかをあわれむがゆえに、しきりに、その使者を彼らにつかわされたが、彼らが神の使者たちを あざけり、その言葉を軽んじ、その預言者たちをのしつたので、主の怒りがその民に向かって起り、ついに救うことができないようになった」(歴代下 36:15、16)。

マタイ 21 章、マルコ 12 章、ルカ 20 章にぶどう園のたとえ話がある。ユダヤ教会に神のしもべたちを送って拒まれたが、「自分の子は敬ってくれるだろうと思って、最後に彼をつかわした」とある。神はまず、ユダヤ人を選民とされた。ところが「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」(ヨハネ 1:11)。ユダヤ人は神の一人子イエス・キリストを十字架につけた。「神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に



与えられるであろう」(マタイ 21:43)。

## 2. 新約時代の真のイスラエルは、アブラハムの血統の民族ではなくなった。

イスラエルは国家、民族として神から見捨てられた。では、真のイスラエルは、何であろうか。イエス・キリストを救い主として個人的に信じる者は、ユダヤ人、ギリシャ人関係なく、みなイスラエルと教えている。(ローマ書、ガラテヤ書参照)。

## 3. エルサレムは字義通りのエルサレムでなく、天にある新エルサレムである。

アブラハム自身も今のパレスチナでなく、天にある都を待ち望んでいたのである。「彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である」ヘブル 11:10 (黙示録 21:1 参照)。

## 4. 字義通りのエルサレム神殿は、AD70年のエルサレム神殿崩壊後、再建されることはない。

### ① 新約聖書はイエス・キリストの体、すなわち教会が神の宮であると教えている。

「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである」(エペソ 2:19-22)。

「この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によるこぼれる霊のいけにえを、ささげなさい」(1ペテロ 2:5)。

### ② あたらしい契約の天の聖所

「以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである」(ヘ

ブル 8:1,2)。

5. では、中東のエルサレムに第三ソロモン神殿建設というのは何であろうか？神が嘉したもうものではなく、終末時代のサタンよみの欺瞞である！

「だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拜まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。…不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである」(2テサロニケ 2:3-4,7-12)。

## 世界の独裁化とポピュリズム

昔から独裁者はいたけれども、ほとんどが民主化に向かう中、世界で独裁化が急騰しているのもなぜかと考えさせられる。

全人代(全国人民代表大会)は2018年3月11日、中華人民共和国憲法第七十九条にあった「国家主席、国家副主席の任期は二期10年を越えてはならない」という文言を削除する憲法改正案を採決した。これにより習近平氏は中共中央総書記および中央軍事委員会主席以外に、国家主席に関しても任期なしの最高指導者の職位に就き続けることができるようになった。

ロシアでも不正な選挙のうちにもウラジーミル・プーチン大統領は18日、さらに6年間の任期を勝ち取った。

北朝鮮の金正恩も独裁。





アメリカのトランプについてこう言われている。

「周囲の意見など一顧だにせず、<sup>いっこ</sup>暴れまくるトランプ大統領の出現。この男に象徴されるように、世界では続々と独裁者が出現してきている。この現象の背後では、いったい何が起こっているのか。 <https://ironna.jp/article/5734>

2017年4月16日、中東のトルコで国民投票があり、憲法の改正が決まった。大統領の権力がぐっと強化され、トルコ国民はトルコの大統領、エルドアン氏に全権を与えた。



トランプ氏の勝利を当初から予測していたジャーナリストの木村太郎氏と国際政治学者の三浦瑠麗氏が、世界を訪れつつある「独裁者の季節」について語っていた。

1940年に公開された米映画『独裁者』は、主演を



務めたチャールズ・チャップリンの代表作の一つである。あれから70年余り。いま、世界は再び「独裁者」の幻影を思い起こし、すがりつつある。

フィリピンのドゥテルテ大統領も、トランプ米大統領に次いでメディアを賑わせた。

日本の安倍政権は独裁とは言えなくとも強硬に法案を通す傾向が強くなり、独裁的と評する人もいる。例えば、共謀罪法案の強硬な成立。

### では、世界はなぜ独裁者を求めるのか。

それは第一に時代性が影響しているように思われる。たとえば、ヒトラーを生んだドイツの場合、第一次世界大戦で決定的な敗北を喫し、ヴェルサイユ条約で多額の賠償金を課せられ、経済的に再起不能な状態に陥った。人々は絶望の淵に追い詰められ、自国を苦境に陥れている国際体制に対して不満を抱き、経済的な喪失感から解放されようと強力なリーダーを求めた。

元外交官の佐藤優氏は、次のように述べている：

「戦争、世界情勢の変化、金融情勢、すぐに政府が判断を下さなければならない事情。民主主義的な手続き、国民の意見を聞いていると、時間がたつ。すると、国家と国民の利益、双方失うことが非常に多い。……。リーダーは即決しなければならない。…独裁と民主主義は相性が良くなる。自由主義はだめ。民主主義が行き過ぎると独裁になる。いまの国際関係が非常に緊張。独裁をゆるす環境にある。」

### 新しい独裁者たち —なぜ個人独裁国家が増えているのか

米国家情報会議・副国家情報官（ロシア・ユーラシア担当）アンドレア・ケンドール・テイラーとミシガン州立大学助教授（政治学）エリカ・フランツとペンシルベニア州立大学准教授（政治学）ジョセフ・ライトの言葉：

「権力者個人に権力を集中させる政治システムは、冷戦終結以降、顕著に増加しており、この現象は大きな危険をはらんでいる。世界が不安定化するなかで、多くの人が、強権者の方が激しい変動と極度の混乱に対するより優れた選択肢をもっていると考えられるようになれば、民主主義の基層的価値に対する反動が起きかねないからだ。実際、社会の変化と外からの脅威に対する人々の懸念が大きくなるとともに、秩序を維持するためなら、





武力行使を躊躇しない強権的で強い意志をもつ指導者への支持が高まっていく恐れがある。「この狡猾さが、21世紀の民主主義に対するもっとも深刻な脅威を作り出している」。

なぜか、世界各地でポピュリズムという現象が頻繁に起こっている。

## ポピュリズムとは？



一般大衆の利益や権利、願望、不安や恐れを利用して、大衆の支持のもとに既存のエリート主義である体制側や知識人などと対決しようとする政治思想、または政治姿勢のことである。

日本語では大衆主義。

聖書の預言からひも解くと、最後の世界を支配する独裁者

はローマ法王教である。

「わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のものであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。その頭の 하나가、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その

獣を拝んで言った、『だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』(黙示録 13:2-4)。

「世界は嵐と戦争と不和で満ちている。しかし一つの頭一ローマ法王権の下で、人々は神の証人に敵対することによって、神に敵対するために一致するであろう。大いなる背教者によって、この連合は固められつつある」(7T 182)。

## ポピュリズムと日曜休業令

「教会と国家の高官たちは、すべての階級の人々に日曜日を尊重させるために、結束して買収や説得や強制を行なうであろう。神の権威の欠如は、圧制的な法令によって補われる。政治的腐敗は、正義を愛し真理を尊ぶ思いを破壊しつつある。そして自由の国アメリカにおいてさえ、為政者や議員たちは民衆の歓心を買うために、日曜日遵守を強制する法律を求め大衆の要求に屈服する。非常に大きな犠牲を払って得られた良心の自由は、もはや尊重されなくなる。まもなく起ころうとしている争闘において、われわれは預言者の言葉の成就を見るのである。『龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った』(黙示録 12:17) (大争闘下 357)。

ローマの総督ピラトも大衆の要求に屈服してイエス・キリストが十字架につけられることをゆるしたのであった。





## 世界最大の情報網バチカンのねらい

### \*バチカン諜報機関の上官が CIA へ

2017年5月23日、ラジオ・ナショナル（オーストラリアの放送局）の朝番組で、オーストラリアの元総理大臣補佐官〔1996—1999〕と元バチカン駐在のオーストラリア大使〔2008—2012〕ティム・フィッシャーが、ドナルド・トランプが合衆国大統領として行った最初の海外訪問の直前に、注目すべき声明を出した。フランシスコ法王との最初の会談を控え、彼がどうすべきかを尋ねられて、ティム・フィッシャーは次のように答えた。

「彼ら（バチカン）は常に、専門家にしっかり準備をさせている…バチカンは**情報の中心**である。**バチカンは、CIA が知らないことを知っている**。実際にバルカン半島での戦争の間（1991—2001）、CIA は、様々な情報を得るためにバチカンを訪れた」（ラジオ・ナショナル放送、2017年5月23日）。



前政府高官と政治家からのこの率直な躊躇（ちゅうちょ）のない応答は、バチカン内部の働きに通じているローマ・カトリックからの並々ならぬ重要さを占めている事がうかがえる。それは1985年に、ローマ・カトリック教の中核の諜報能力について、元イエズス会司祭の故リベラ博士が言明したことを裏づけるものである：

「最も暗い歴史の秘密から、20世紀の最も高度な兵器の秘密に至るまで、幾世紀にもわたって、情報が彼ら〔バチカン〕の地下トンネルに貯蔵された。これらの情報はあらゆる国々から集められて、ローマ・カト

リックによって供給され、世界中の政府のあらゆる部署において機能している。

懺悔室からの情報が、世界の最も辺鄙な場所からも続々と入ってきて、社会的、宗教的、軍事的、政治的、教育的また諜報機関の事柄に関する情報がバチカンに絶えず流れ込んでいる。

諜報部員の報告が、FBI、CIA、KGB 内部の要職についているローマ・カトリック信者や、世界中に散在するすべての諜報部から入ってくる。バチカンの諜報部員は、その優秀さにおいては世界トップクラスである」（四人の騎手7ページ、1985年）。

次の抜粋は、世界のさまざまな出来事に、バチカンがどれほど政治的に関与しているかを示している：

「〔バチカンは〕生の情報を有した世界最大の宝庫のひとつであり、そこは**スパイの金鉱**である。教会、政治、経済に関する情報が、何千何万という司祭、司教また教皇大使たちから毎日流れ込む。彼らは、教皇庁の事務局へ定期的に報告をしている。**この情報源**は極めて潤沢であるため、第二次世界大戦直後、CIA〔中央情報局〕はローマ教皇庁内の展開を盗聴、監視するために、その対情報活動機関部に特別な部署を設けたほどであった。

だが、カトリック教会に対するCIAの関心は、情報収集に限定されない。巨万の富と政治的影響力を有するバチカンは、近年、地球規模の政治において鍵となる勢力になっている。特に東ヨーロッパとラテンアメリカにおいて、カトリックは最も大切な役割を果たしている。ほとんどのカトリック信者に気づかれることなく、政治とは無関係のイメージを注意深く維持しつつ、バチカンは、外務省や外交団を有するばかりでなく、外交政策も有している。またポーランドの共産主義者らがカトリックに帰依し、ラテンアメリカのカトリック信者らが共産主義に傾倒している状況を見て、米国政府、特にCIAは、最近バチカンの外交政策にただならぬ関心を抱いている」（マザー・ジョーンズ、1983年7—8月）。

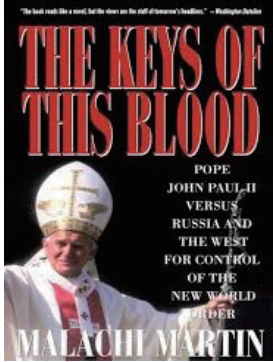
目立たない外交手段を通じて、教皇の諜報機関がどれほどローマの目的を成し遂げているかを例示するものとして、タイム誌は、ロナルド・レーガン大統領と法王ヨハネ・パウロ二世との間の「聖なる同盟」を取り上げた有名な記事—1980年代にカトリックの連帯運動を支持することによりポーランド内の共産支配を蝕むための秘密の共同—において、バチカンの情報筋がいかに細心かつ徹底的なものであるかを伝えた。

「軍事的事柄については、アメリカの諜報機関がバ



チカンのそれよりも勝っていたが、政治的状況の評価することにおいては、教会がよりすぐれていた。そして、民衆の意向を理解し、連帯の指導部と通じ合うことにおいて、教会は卓越した立場にあった。『司教らが教皇庁や独立自主管理労働組合と継続的に接触していたので、ポーランドに関する我々の情報網はひじょうにしっかりしていた』と、当時のバチカンの副秘書官、シルベストリーニ枢機卿は語っている。『彼らは囚人について、連帯の活動や必要について、また政府内の姿勢や分裂について、われわれに逐一知らせてくれる』と。こういった情報はすべて大統領またはケーシー〔当時のCIA長官〕に伝えられた」（タイム、1992年2月24日）。

1991年、故イェズス会著述家マラカイ・マーティンは、ローマの教会が、地球規模の業務において最高権威と認められようと熱心に追求してきたことを果たすために、あらゆる政治的、外交的、経済的そして社会的活動に従事してきたことを暴いた。



「…〔法王ヨハネ・パウロ二世〕自身が、最も広範囲にわたる、深く経験済みの三大グローバル勢力〔バチカン、米国、ソ連〕のかしらであった。その状況が短期間のうちに、千年以上にもわたって人間社会を定義してきた、世界政治体系の国家制度を終わらせることだろう。

…地政学的争いの地域にヨハネ・パウロが据えた杭は、すべて、すなわち彼自身、法王教の登場人物、彼が現在組織化している昔からの使徒ペ

テロの地位、そしてその教会全体を含むものである。それは、世界に並ぶものがない制度化した組織として、また神秘的な聖体拝領のきずなによって結びつけられた信者の団体としての両方を含んでいる…

**新世界秩序**をめぐる競争における最後の対抗馬は、ひとつの団体または地域における一個人の指導者ではない。それは、ひとつの共通した目標に到達しようとの目的を掲げるひとつの権力、精神そして意志においてひとつに結ばれた者たちの集団である。彼らの目的とは、新たな地球規模の覇権を握るための競争に勝利することである」（この血の鍵 17 ページ）。

聖職者が関与した幼児への性的虐待や、バチカン銀

行の評判を損ねる経済スキャンダル、ローマ教皇庁内部の抗争、西側諸国のカトリック信者間にはびこる自由主義〔彼らは結婚、避妊、中絶、道徳などに関するカトリックの伝統的な教義を軽べつする〕などを含む多数の問題が山積するにもかかわらず、ローマ・カトリックの聖職者位階制度は、その組織の権力を誇示し、その壮大なもくろみを成し遂げるために、その恐るべき資源をことごとく利用する心構えである。

神の僕 E.G. ホワイトはこう言っている：

「ローマ教会の抜け目なさや狡猾さには驚くべきものがある。この教会は、何が起るかを読みとることができる。法王教は、プロテスタント教会が偽りの安息日を承認して忠順を表わしていることや、過去に法王教自身が用いたのと同じ手段で、プロテスタント教会がそれを強制する準備をしていることを見て、時機を待っている。…

ローマ・カトリック教会は全世界にわたって根を張り、法王庁の支配下においてその利害に役立つよう計画されている一大組織を形成している。全世界のあらゆる国において、聖餐にあずかる幾千万の者たち (communicant-報告者) は、法王に対する忠誠を堅く保つように教えられている。国籍や政府がどうであろうと、彼らは教会の権威をほかのいっさいのものの上にあるものとみなさなければならない。彼らは国家に忠誠を誓うかもしれないが、その背後には、ローマに対する服従の誓約があって、教会の利益に反する場合には、国家に対するどんな誓いも破ってもよいことになっている」（大争闘下 339）。

「…その目的とするところは、富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった」（大争闘下 294）。

# キリストはいつから仲保者としての働きを開始したのか？

「再臨信仰の基礎であり、中心的柱はダニエル 8:14」（大争闘下 119）。この記事は、イエスが昇天後、天の聖所で大祭司の働きを開始されたことを証明している。それによって、1844年の至聖所の働きも不動のものとなる。

— 編集者 —

Ministry Magazine Archives/1941/June

フランシス・バーグ  
ワラワラ大学神学部

**セ**ブンスデー・アドベンチストは、キリストは昇天後、天の聖所に入れられ、1844年まで天の聖所の第一の部屋で大祭司として奉仕しておられ、1844年以後は至聖所に移られ、最後の局面の働きをしておられることを教えている。その前提のもとでわが教会は、長年の間、「神の裁きの時がきた」（黙示録 14:7）と宣べ伝えてきた。もし前提が理に適っているなら、この厳粛な告知の時はどうして延びているのであろうか。それがいろいろな論争を巻き起こしている。そこで、この厳粛にして重大な問題を考えてみよう：

**何**年か前のワシントンにおける世界総会に出席したとき、私ははじめて、わが教会のキリストの大祭司の働きについての新しい教えに接した。海外で宣教師として働いていた二人の牧師の提示であった。彼らは、天におけるキリストの大祭司の働きについて新しい光を持っていると主張していた。彼らは自分たちの主張を非常に熱心に話していた。しかし、ある牧師たちのグループで話をしていた、受け入れられなかったのでわが教会を離れてしまった。

**彼**らの主張はこうであった。つまり、天におけるキリストの祭司としての働きは、人間の墮落の時から始まった。それは、十字架の時まで、天の聖所の第一の部屋で祭司の働きをしていたというものであった。さらに、キリストの昇天後、至聖所に入れられて大祭司の働きをされた。決してセブンスデー・アドベンチストが教えているように 1844年に至聖所に入り「最後のあがない」を開始されたのではないと主張した。も

し、その教えが正しければ、セブンスデー・アドベンチストの 2300 日 / 年の預言、聖所の清めに関する教えは間違いだということになる。また更に、預言の霊の信ぴょう性もなくなる。なぜなら、証の書は、この聖所に関する解釈を強力に支持しているからだ。

**従**ってこの問題は、非常に重要な問題である。もし、イエスの祭司としての働きが、我が教会が教えるように、昇天後、天の聖所の第一の部屋に入られたのであって、この「新しい光」の主張者たちが言うように、人間が墮落した時から天の第一の聖所で祭司としての働きをされたのではないことが証明されたら、彼らの主張はいともたやすく崩壊する。そしてわが教会の見解が堅固な土台の上に立っていることが分かるであろう。この問題は、この二人の死後もおさまらなかった。なおもわが教会の教えに挑戦する人たちがいる。この問題に直面した時に聖書的に対応する必要がある。

## 1. キリストは昇天後、天の聖所に入れられ祭司の働きを開始されたのか、それとも？！

**我**々は 1 世紀以上もさばきが 1844 年から始まったと教えてきた。それ以来「聖所の清め」が行われていると表現してきた。別の表現で、キリストは天の聖所の至聖所に大祭司の最後の働きの局面に入れられたと



教えている。予型では、7月10日の聖所の清め=贖いの日（ヨム・キプール）に、悔い改めた者の罪がすべて除去されることになっていた（レビ16:30）。実体では、1844年から、聖所の清め一罪の除去が天の至聖所で成し遂げられる。教会は一貫してダニエル8:14の2300日/年の預言は、天の聖所におけるキリストの最後の働きを表していると教えてきた。

ここでは、1844年がどのように計算されたのかという日時の年代の研究は取り扱わない。セブンスデーアドベンチストに挑戦されている教え、すなわち、①キリストは、人類が堕落してから天の聖所において祭司の働きを始めたのか、または、②1844年ではなく、キリストは昇天後、すぐ天の至聖所に入られたのかということに絞って学んでみたい。わが教会の聖所の教えとは異なる主張に留意したい。

この問題の核心はこれである：①キリストの天の聖所の働きは十字架の死、あるいは昇天以前にあったのかということ、②そして反論者が言っているように、1844年ではなく、地上から天に帰られたときに天の至聖所に入られたのかということである。キリストは昇天後に、祭司としての働きを開始されたということさえ証明できれば、ことはすべてあっさり解決されるのである。わが教会の教えは堅く立つであろう。

まず、鍵となる聖句は1テモテ2:5である：「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」。御子キリストは我々の仲保者となるために、神は御子を人類家族にお与えになった。ただ一時御子をこの世に貸しておられたのではなく、人類にお与えになったのである。御子の受肉は、奥義中の奥義である。

「**確**かに偉大なのは、この信心の奥義である。『キリストは肉において現れ…た』（1テモテ3:16）。彼が生まれる前に、「その名は『インマヌエル』と呼ばれるであろう。これは、『神われらと共にいます』という意味である」と言われた（マタイ1:23）。この不可解な神秘を預言者イザヤは預言した：「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、そ

の名は、『霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」イザヤ9:6。

「『**万軍の主は、こう仰せられる、見よ、その名を枝という人**がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に平和の一致がある』」（ゼカリヤ6:12,13）。新改訳では「【主】はこう仰せられる。見よ、ひとりの人がいる。その名は若枝」（欽定訳も同じ）。

「**見よ、ひとりの人**」は、神我らと共におられるお方、イエス・キリストである。我々の祭司となられたのは人=人間となられたお方である。神と人との間の仲保者である。瞑想に足る最も素晴らしいテーマはキリストの受肉である。「王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいる」ということに留意してほしい。ここでの彼は、「祭司である」ではなく、「祭司となるであろう」-- shall be(未来形)である。

ゼカリヤの時代から未来に祭司となるであろう(未来形)と言っている。この人なるお方がいと高きところに上られて、天父の右に座した時に、このことが成就したのである。預言者は「見よこの人を」と言った。ピラトも言った「見よこの人を」と（ヨハネ19:5）。ピラトはこの人に何の罪も見出すことができなかった。

かつて生きた人でこの人のように欠点のない人はいなかった。ヘブル4:15に「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」とある。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである」ヘブル7:25,26。決して見逃してはならない点はこれだ：

人間として完全であったお方、この方のみが我々の仲保者なのである。肉を取られて生まれた後である。決してその以前ではない。

## 永遠の救の源となるために大祭司となるためにどんな経験をされたらうか。

「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり」（ヘブル 5:7-9）。

**彼**は、苦しみによって、我々の救い主とられた。「しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり」（ヘブル 9:11）。大祭司となられてというのは、それ以前は大祭司ではなかった。ヘブル 10:12 に注意していただきたい。「しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し」とある。従ってご自身をいけにえとしてささげて後、大祭司となって神の右の座につかれたのであって、それ以前ではない。ヘブル 9:12 「かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。」「ご自身の血によって」聖所に入られたのであるから、十字架で血を流されて後に大祭司としての働きを始められたことが明確である。

## II. 憐れみ深い大祭司となるために

もう一つ重要な観察。キリストが我々の人性を取られて、人間の弱さ、誘惑をよくよく知りつくしておられるゆえに、彼は我々に次のように言うておられる：「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練

に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル 4:15、16）。彼是我々の大祭司として天におられる。御父の右におられる。「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである」（ヘブル 8:2）。

「兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕屋をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいて行くことができるのであり、さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、心はずすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」（ヘブル 10:19-22）。

ここで観察できることは、我々罪人が神のみ前にはばかりことなく近づくことができる理由である：

- ① **イエスの血**、
- ② **彼の肉体なる幕屋、すなわち彼が受肉された事実**、
- ③ **あたらしい生きた道**—古い契約の道ではない、
- ④ **大いなる大祭司**—「わたしたちの弱さを思いやることのできる」大祭司（ヘブル 4:15）である。神であり人であるイエス・キリストこそ我々の仲保者である。

人類の墮落後キリストの死に至るまで4千年間、天の聖所において祭司の働きをしておられたというのは、墮落後すぐにキリストはご自身の血を流しておられることになる。それは、新約聖書と矛盾する。なぜ、神の御子は、4千年間待たないで、すぐ死なれなかったのだろうか？我々は神の知恵に挑戦してはならない。無限の知恵で十字架の死を設定しておられたのである。「時の満ちるに及んで」キリストは来られたのである（ガラテヤ 4:4）。その理由は神にゆだねることにして、重要なことは、「人なるキリスト・イエス」こそ我々の仲保者であるということである。我々の身代わりとしてのキリストの苦しみと死なくして救いはない。人類のために彼は死を味わうために人となられた。罪に抵抗できない人間の弱さ、誘惑に遭遇し、



人としてこれらすべてのことに勝利することによって「憐れみ深い忠実な大祭司」となられたのである。この目的のためにアブラハムの性質をおとりになったのである（ヘブル 2:16-18）。

**罪**は犯されなかったが、我々が誘惑されるように誘惑を受け、「誘惑される者たち」を救うことができるお方となられた（ヘブル 4:15；2:18）。「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル 4:16）。

### III. 天の聖所の第一の部屋と第二の部屋

**注**：ヘブル書で聖所全体を指すときには、ギリシャ語の Ta hagia（タ・ハギア）を使い、第一の部屋＝聖所と第二の部屋を区別するときには、hagion（ハギオン）と hagia hagion（ハギア・ハギオン）と使い分けられている。9:3 では hagia hagion つまり、至聖所のこと。9:8、12 で昇天後「聖所に入られた」という場合、Ta hagia（タ・ハギア）、すなわち、聖所全体を意味している。英語では holy places（複数）を指す。

へブル書でパウロは、地上の旧約時代の古い契約の聖所と新約時代の新しい契約の天の聖所を比較しているのであって、天のどの部屋に入ったとは言っていない。地上の聖所に二つの部屋があったように、天にも二つの部屋があること、地上の聖所に二つの奉仕があったように、天の聖所にも二つの奉仕があることを比較しているのである。メルキゼデクの祭司制はキリスト初臨以前にあったと主張するのは根拠がない。旧約時代の人々は、未来の「神の小羊」の血に対する信仰によって、罪ゆるされ、約束を信じて義とされたのである。我々が二千年前のキリストの犠牲に対する信仰によって義とされるように。

**セ**ブンスデー・アドベンチストへの反論者は、よくヘブル 6:19 を引用する。「この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨

であり、かつ「**幕の内**」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなつて、はいられたのである」（ヘブル 6:19, 20）。残念なことに新共同訳では「**至聖所の幕の内**」としている。「至聖所」は追加した言葉である。それは次の聖句から非聖書的であることが分かる。

**第一**に、昔の聖所に二つの幕があった（出エジプト 26:31-37 参照）。外庭と聖所を分け隔てるカーテンと聖所と至聖所を隔てているカーテンは「垂れ幕」「とばり」と呼ばれた（民数記 3:25-31 参照）。民数記 4:5, 15 には第二の幕を指し、18:7 の幕は第一の幕を指している。

**第二**に、ヘブル 9:3 は明らかに第二の幕を指している。これらの聖句から「幕」というときには、外庭と第一の部屋（聖所）を隔てる幕と第一の部屋と第二の部屋（至聖所）を隔てる幕、両方を指して、パウロはどの幕とは指定していない。ヘブル 9:19 の聖句をもって至聖所に入ったと主張するのは妥当でない。

へブル書でキリストが聖所に入られたと言うとき、いくつかの表現が用いられている。キリストが天の大祭司として奉仕なさる場所を概して天そのものに入りとか（9:24 新改訳）、「幕の内に」（6:19）とか「天にあって大能者の御座の右に座し」（8:1）、とか、「一度だけ聖所にはいられ」と表現されている（9:1）。

**こ**のような考察から引き出せる結論は、我らの主は、この地上で人として罪のない生涯を終えられ昇天してから、天の聖所で天父の「御座の右に座し」て、祭司の働きに携わられた（ヘブル 8:1）。「その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に平和の一致がある」（ゼカリヤ 6:13）。昔の聖所の奉仕のように、祭司として天の第一の部屋に入り、そこで働きを開始された。第一の聖所の働きは 1844 年まで続いた。1844 年からは、昔の大祭司のように、イエスは第二の部屋に入れ、大祭司として贖いの最後の働きを始められた。それは、イエスの再臨の前になされる特別な最後の「聖所の清め」の働きである。そのこと

については別の研究になる（レビ記 16:30 参照）。

**イ** エス・キリストは十字架の死以前、旧約時代は天の第一の部屋＝聖所で奉仕しておられたという主張は、完全に非聖書的であることが、明白になる。ユダヤの7月10日、1844年の10月22日にイエスが大祭司としての最後の局面に入られたというセブンスデー・アドベンチストの教えを証明するのは、難しいことではない（ダニエル 8:14;9:24-27）。

**ス** テパノは、「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言った（使徒 7:56）。

## STUDY

# 異邦人の時が満ちるとは

金城重博

「そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう」ルカ 21:24。

「一部のイスラエル人がかたくなになつたのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであつて、こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、『救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう』」ローマ 11:25、26。

ここで、イエスとパウロが同じ出来事を書いていることは明らかである。「異邦人の時期が満ちる」「異邦人の時の終わるまで一新改訳」というのはいつのことだろうか？「イスラエル人は、すべて救われる」とはいつの事だろうか？1967年6月、イスラエル軍がエ

ジプトなどに侵攻し、わずか6日間の戦争でイスラエルが圧倒的勝利を収め、シナイ半島、ガザ地区、ゴラン高原などを占領したことがあった。その時、多くのキリスト教会の説教者たちは、これらの聖句をこの事件に当てはめて説教していたことがあった。SDAの中にも、そう思っている人たちがいたようである。

ニュースから聖句を解釈すると、とんでもない的外れな解釈になることがある。イエスとパウロ以外に、このことについてあかししている預言者が二人いる。預言者ダニエルと黙示録の記者ヨハネである。もし、上記の聖句をダニエル書と黙示録の光に照らして見るならば、「異邦人の時」に関するとんでもない聖書の誤用と混乱から救われるであろう。



## 異邦人の時はいつ始まったの だろうか？

バビロンがユダ王国に侵入してこれを滅ぼした不幸な時から、異邦人の時は始まった。エルサレムと神の民は異邦人によって踏みにじられたのだ。その時、王冠がイスラエルから取り除かれ、異邦人の手に渡った。エゼキエルは次のように言っている：

「汚れた悪人であるイスラエルの君よ、あなたの終りの刑罰の時であるその日が来る。主なる神はこう言われる、かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。すべてのものは、そのままには残らない。卑しい者は高くされ、高い者は卑しくされる。ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる。わたしが与える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない」エゼキエル 21:25 - 27。

注解者ホワイトは次のように言っている：

「イスラエルからとり去られた王冠は、バビロン、メド・ベルシャ、ギリシャ、ローマの各王国につぎつぎに渡った。神は言われる。『わたしが与える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない』（エゼキエル 22:26、27) その時は近い」教育 212(1903年)。

エルサレムのダビデの位に関して、神は「破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる」と言われた。3回も繰り返して言われていることには理由がある。バビロンによってエルサレムとダビデの位が破滅に陥ったことが3回あった。紀元前605年にネブカデネザルがエルサレムにきて征服し、エホヤキムは王位をはく奪された。彼が、預言者エレミヤの忠告に反して、バビロンの権威に反逆した時、ネブカデネザルは、再度、紀元前597年にエルサレムを征服し、最初はエホヤキムを王位につけ、それからゼデキヤを王位につけた。ゼデキヤが反逆すると、ユダ王国に対するネブカデネザルの堪忍袋の緒が切れた。3度目には、紀元前586年にエルサレムに軍隊を送って、この時には都が完全に破壊され、聖所は焼かれ、民のほとんどは捕虜となってバビロンに連れていかれた。このように、ダビデの位は、破滅、破滅、破滅となったのである。しかし、これで終わりではなかった。神は永遠のダビデの位を設立すると言われた（2サムエル 7:13；詩篇 132:11, 12）。しかし、神はエゼキエルを通してイスラエルは、「わたしが与える権威をもつ者が来る時まで」は王位につく者はいないと言われた。そのお方が来る

までは、異邦人が主権を持ち、エルサレムは踏みにじられることになっている。

## 70年間の捕囚期間の終わり

エレミヤを通して神は、エルサレムの荒廃の期間は70年であると言っておられた（ダニエル 9:2）。ユダヤ人は、その預言が早く終わることを期待していた。ダニエルも捕らわれの身となっていた。彼も王国が70年の終わりに起こることを期待していた。いくつかの幻のシリーズで彼は、王冠がイスラエルに戻されるのは、バビロン支配が終わっても起こらないことを示された。王冠はあと三つの異邦の王国が過ぎてからでないで起こらないのだ。これらの権力が神の民を踏みにじる事になっていた。

未来に関するこれらの驚くべき啓示を受けたダニエルはどう反応しただろうか？7章で、四つの獣と小さい角の幻を見せられた彼は、次のように書いている：「そこで、われダニエル、わがうちなる霊は憂え、わが脳中の幻は、わたしを悩ましたので、…その事はここで終わった。われダニエルは、これを思いまわして、非常に悩み、顔色も変った。しかし、わたしはこの事を心に留めた」（7:15, 28）。しかし、雄羊と雄山羊と小さい角が神の民を踏みにじり、それが2300年も続くことを思うと、耐えられなくなった。「われダニエルは疲れはてて、数日の間病みわずらったが、後起きて、王の事務を執った。しかし、わたしはこの幻の事を思って驚いた。またこれを悟ることができなかった」（8:27）。

預言者はこのことを心に秘めたままにしておくことはできなかった。9章で、彼は神に心を注いで祈っている。エレミヤの70年の預言を知って、もうこの預言が満ちる時だと思い、これをずっと先に延ばさないで下さいと懇願する。

彼の失望、魂の嘆きを想像していただきたい。彼が青年の時に故郷を離れたのが約70年前のこと。シオンの荒廃をどれほどしばしば嘆き悲しんだことであろう。70年も終わろうとしている今、捕らわれの身となつてから長い月日が経っていた。すでにダニエルは、90歳くらいになっていた。彼は死ぬ前に回復を見ることをどれほど望んだであろうか。彼は今その預言の成就する時が来ていることを思うと心が高揚した。しかし、神はこれらの幻を通して異邦人が神に敵対し、神の民と聖所が踏みにじられるままにされることはずっと先までだということを示される。預言者が尋ねると、そ

れは、あと 2300 年だと言われる！ほんとに？どうしてそんなことがあるのか？異国での 70 年間も永遠のように思えたのに、さらに 2300 年も延ばされるとは！天使がやってきてダニエルに言った、「先に示された朝夕の幻は真実です」（ダニエル 8:26）。

高齢になっていたダニエルは耐えられなかった。数日病みわづらった。このショックから立ち直った時、彼は、どうして神はそんなに時を延ばされるのかを理解しようとした。

神は答えて言われた、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復す」8:14。ますます混乱した。彼は、エレミヤの預言 70 年間と聖所が清められるまで 2300 年もあることの間隔が分からなかった。天使ガブリエルは、部分的解き明かしを与えただけで、「先に示された朝夕の幻は真実です。しかし、あなたはその幻を秘密にしておかなければならない。これは多くの日の後にかかわる事だから」（26 節）と言われた。

「ダニエルはイスラエルのためになお心を悩まし、改めてエレミヤの預言を研究した。それは非常にはつきりしたものであった。彼は書物に記されたこれらの明白な記録によって、『主が預言者エレミヤに臨んで告げられたその言葉により、エルサレムの荒廃の終るまでに経ねばならぬ年の数は 70 年であることを』悟った（同 9:2）。ダニエルは確かな預言の言葉に基づいた信仰をもって、これらの約束が速やかに成就されるように主に嘆願した。ダニエルは神の誉れが保たれるように嘆願した。彼はその訴えのなかで、神のみこころに従わなかった人々と自分とを全く同じ状態におき、彼らの罪を自分自身の罪として告白した」国と指導者下 163。

このような背景のうちに、我々は 9 章にあるダニエルのあの偉大な執り成しの祈りを理解することができるであろう。神は、回復をはるか未来に延ばし、遅らせるのはなぜだろうか？ もうユダヤ人は 70 年間の捕囚で十分屈辱を経験し、心を低くしたのではなかったのだろうか？これらのことを考えながらダニエルは神の前に悔い改めと懺悔の祈りをする。彼自身も含めて父祖たちの罪を悔いて約束を延ばさないで下さいと祈る。彼は彼の良き業や神の民の義をもって神の前に懇願をしているのではない。ただただ神の憐れみと慈しみに頼って懇願する。

「すなわちわたしは、わが神、主に祈り、ざんげして言った、『ああ、大いなる恐るべき神、主、おのれを愛し、おのれの戒めを守る者のために契約を保ち、いつくしみを施される者よ、われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。われわれはまた、あなたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、君たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いませんでした。

主よ、正義はあなたのものですが、恥はわれわれに加えられて、今日のような有様です。すなわちユダの人々、エルサレムの住民および全イスラエルの者は、近き者も、遠き者もみな、あなたが追いやられたすべての国々で恥をこうむりました。これは彼らがあなたにそむいて犯した罪によるのです。

主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君たちおよび先祖たちのものです。これはわれわれがあなたにむかって罪を犯したからです。あわれみと、ゆるしはわれわれの神、主のものです。これはわれわれが彼にそむいたからです。

またわれわれの神、主のみ声に聞き従わず、主がそのしもべ預言者たちによって、われわれの前に賜った律法を行わなかったからです。まことにイスラエルの人々は皆あなたの律法を犯し、離れ去って、あなたのみ声に聞き従わなかったので、神のしもべモーセの律法にしるされたのろいと誓いが、われわれの上に注ぎかかりました。これはわれわれが神にむかって罪を犯したからです。

すなわち神は大いなる災をわれわれの上にくだして、さきにわれわれと、われわれを治めたつかさたちにもむかって告げられた言葉を実行されたのです。あのエルサレムに臨んだような事は、全天下にいまだかつてなかった事です。

モーセの律法にしるされたように、この災はすべてわれわれに臨みましたが、なおわれわれの神、主の恵みを請い求めることをせず、その不義を離れて、あなたの真理を悟ることをもしませんでした。それゆえ、主はこれを心に留めて、災をわれわれに下されたのです。われわれの神、主は、何事をされるにも、正しくあらせられます。ところが、われわれはそのみ声に聞き従わなかったのです。



われわれの神、主よ、あなたは強きみ手をもって、あなたの民をエジプトの地から導き出して、今日のように、み名をあげられました。われわれは罪を犯し、よこしまなふるまいをしました。

主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りを取り去ってください。これはわれわれの罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、われわれの周囲の者の物笑いとなったからです。

それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさまを見、み名をもってとなえられる町をごらんください。われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです。

主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あなたの民は、み名をもってとなえられているからです』(ダニエル9:4-19)。

神はこの執り成しの祈りに答えられる。70年の預言と2300年の関係を明確に彼に説明される。ガブリエルは、エルサレムを回復し、再建される法令について説明する。ダニエル9:25。ユダヤ人は都と聖所を再建するためにパレスチナに帰還するのであった。しかし、ダニエルは、70年間は部分的にして一時的な回復であることが分かってきた。王国は、バビロン捕囚の終わりに回復されるのではないことが分かった。確かにそれは、部分的にして一時的なものであることが分かった。完全にして最終の回復は2300年経ってから後に起こることなのである。

## 紀元前536年と紀元後1844年の驚くべき類似点

ユダヤ王国は3回破滅した。紀元前605年、597年と586年。70年間は、最初の破滅紀元前605年から数える。放浪から帰還する法令が3回も出された。536B.Cのクロス王の法令、520B.Cのダリウス王の法

令、そして457B.Cのアルタシャスタ王の法令(エズラ1,6,7章を参照)。再建の法令は536B.Cのクロス王から始まっていた。

法令に先だって、バビロンは539B.Cに滅亡していた。神の民を捕囚としていた権力は倒れていた。今や神の民はパレスチナに帰る自由が与えられた。クロス王の法令で50,000人のユダヤ人が母国に帰った。2年経って彼らは聖所の土台を築いて神殿の回復という偉大な働きを開始した。

では、2300年の終わりの事件との類似点を見よう。注解者ホワイトの言葉によく表現されている：

「選民であるイスラエルによって、神が世界のためになそうとご計画になったことを、神はついに今日の地上の教会によって達成なさるのである。…」

今日神の教会は、失われた人類に対する神の救いの計画を何の妨げもなく、その完成に向かって推進することができる。…この地上の神の教会は、イスラエルの人々が、捕囚期間中バビロンに捕らえられていたのと全く同じように、この長い冷酷な迫害期間中、捕囚状態にあったのである。

しかし ありがたいことに、神の教会はもはやつな がれていない。…

悪の軍勢は、もはや神の教会を捕らえておく力はない。なぜなら『その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた』『大いなるバビロンは倒れた』からである」国と指導者下315-316。

70年間と2300年との類似点をまとめてみよう：

1. ユダヤ人はバビロンに捕囚となっていた。キリスト教会は、黙示録という霊的バビロン—法王権力によって捕囚とされた。
2. 70年の終わり近くにバビロンは倒れた。2300年の終わりに「霊的バビロン法王権力は倒れた」(黙示録14:8)と宣言された(538年から1798年の1260年の中世時代=暗黒時代)。
3. クロス王の法令によって50,000人のユダヤ人がバビ

ロンから出た（エズラ 1、2 章）。1844 年の夏「バビロンは倒れた」とのメッセージに回答して 50,000 人の再臨信徒たちが墮落した諸教会を分離、脱会した（大争闘下 76）。

4. バビロンを出たユダヤ人たちは、聖所の回復に着手した。バビロンから出て 2 年後のことである（エズラ 3 章）。1844 年に再臨信徒たちは聖所が清められて正しい状態に回復される働きに着手し始めた（ダニエル 8:14）。バビロンを出て 2 年後に、彼らは聖所の教理の土台を据えた。— 1846 年に、O.R.L. クロージャーは Day Star Extra 誌に聖所の清めについての明確な光を書き表した。

70 年と 2300 年とのこの驚くべき類似点は、アドベント教会の輝かしい未来に確信を与えることになった。これらの過去の歴史と預言を知らない者たちは、神の教会がなおバビロンの捕囚にあると言おうとしている。しかし、こうした推測は真実ではない。このような適用をする者たちは、教会の現在の立場を正しく把握していない。我々は、アドベント運動の型を 536B.C の後に見なければならぬ。ユダヤ人たちが信仰の欠如と利己心と怠慢のため、すばやく聖所の回復をなしとげるのに失敗したように、ラオデキヤの教会も今日神の働きの速やかな完成に失敗した。古代の神殿建設の進展が遅かったため、神はハガイとゼカリヤをお立てになった。そのように、これらの二つの書に見られるような覚醒メッセージを神は起こされた。

## イスラエルの希望

イスラエルの希望はダビデの位に王が回復されることにある。ユダヤ人たちは王国が 70 年の終わりに起こらなかったため失望した。彼らはダビデの位につくべきお方を知るために預言を研究した（エゼキエル 21:27）。王国の回復がイスラエルの大いなる希望であった。その時彼らは、異邦人の圧制から救出されるのを理解していたのである。

約 400 年待って後、ローマの圧制がイスラエルの上に重くのしかかってきた。彼らは救出を希求した。すると、ユダヤ国民は「悔い改めよ、天国は近づいた」との荒野に叫ぶ声によって驚愕（きょうがく）させられた。しばらくしてメシアが出現して「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マル 1:15）とのメッセージを聞く。多くの者は、イスラエルを解放し、ダビデの位につく方は、このような卑しい方であるはずがないとつまづいてしまう。しかし、イエスを喜んで信じた者たちはこのお方こそ王国を回復するお方と思った。イエスが十字架につけられた時、

彼らの希望も共に十字架につけられ、打ちのめされた。しかし、イエスの復活後、弟子たちは彼のもとにやってきて「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」と質問した（使徒 1:6）。もちろんイエスの答えは「否」であった。マタイ 24 章、ルカ 21 章にあるように、神の民は、更なる患難によって異邦人に踏みにじられることになっていた。

弟子たちにそのことは知らされなかったが、終わりの時まで封じられたダニエルの預言が神の民に開示されるのであった。王国は、バビロンの破滅のときにイスラエルに戻されなかった。ペルシャの時にも回復されなかった。ローマ帝国の時にも回復されなかった。それは、長い法王教の支配まで回復されなかった。その後、天の至聖所において審判が設けられることになっていた。何の目的だろうか？

「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に任せさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない」（ダニ 7:13、14）。

ああ、この審判でキリストがダビデの位を受けることは明白である。ダニエル 7 章は審判がいつ起こるかという正確な日時は知らされていない。それは、次の 8 章で明らかにされる。ダニエル 8:14 だ。1844 年が回復の標識（目印）である！定められた時に、我々の大祭司は天の聖所の至聖所に入られて王国を受けることになる。それを受けて後に、彼は力と大いなる栄光のうちに再臨なさる（初代文集 453）。

今こそ、彼の裁きの時であり、ご自分の民の王として彼がその位を回復するときなのである。イスラエルの望みが成就されるべき時である。イスラエルは 70 年捕囚の後に部分的な回復を見ただけである。しかし、今日完全にして最終的な回復の時に我々は住んでいる。「このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかれねばならなかった」（使徒 3:21）。

## 異邦人の時は満ちた

異邦人の時は、605B.C のユダ民族の破滅から始まった。すなわち、エルサレム—旧約時代のユダヤ人も、



新約時代の靈的ユダヤ人も異邦人によって踏みにじられてきた。次々に異邦人の権力によってバビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマによって神の民は迫害されてきた。字義通りのイスラエルは、メシアを十字架につけたので、新約時代は靈的イスラエルーキリスト教に取って代わった。しかし、最も最悪な中世の患難時代は、ローマ法王教の支配の時であった。イエスは「そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう」と言われた（ルカ 21:24）。

異邦人の時はいつ満ちるのだろうか？ 黙示録の記者ヨハネは次のように言っている：「聖所の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう」（黙 11:2）。イエスとヨハネが同じことを言っているのは、明白である。ヨハネは、ダニエル7章で言っていることを繰り返しているのである。つまり教会（聖都）は、1260年間、法王教の支配において踏みにじられることになっていた。ダニエル8章でさらに明瞭にされている。ダニエルは、小さい角（法王教）が聖所と教会を踏みにじったとき、み使いに聞いた「常供と、荒すことをなす罪と、聖所とその衆群がわたされて、足の下に踏みつけられることについて、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と（ダニ 8:13）。彼は答えて言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」（ダニ 8:14）。異邦人の時は 1844 年に成就した（ルカ 21:24、ローマ 11:25, 26、黙示録 11: 2）。そして、ダニエル 8:14 も同じことを言っているのである。

では、異邦人の時が満ちたということの意義を探ってみよう。

2、600 年前に王冠はイスラエルから異邦人に移された。預言に現わされた偉大な国家が次々と興亡してきた。神の民は圧迫されてきた。ダビデの王座に王が不在の状態が続く。長い暗黒時代、神の民は安全と保護のないままであった。しかし、キリストご自身が、異邦人の時は満ちると言われた（ルカ 21:24）。彼らは割り当てられた歴史の舞台で役割を果たした。キリストがその王国を受けるために審判に入られた。ご自身のためだけでなく、ご自身の聖徒のためでもあると言われている。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる」ダニ 7:27。

今日の靈的イスラエルの熱心さと期待は、弟子た

ちのそれと比べてどうだろうか？弟子たちは彼らの時代にダビデの王国が設立されると思っていた！ところが、すべての預言者たちによって語られた万物更新の時に住んでいる今日の教会の応答はどうだろうか？なまぬるい状態と言われている！

異邦人の時は終わりに来ている。今日、国々が覇権を争い混乱状態である。一つのことだけが残っている。それはキリストに王国と主権が与えられることだけである。すべての栄光、力、権威がキリストに戻されなければならない。170 年前にイエス・キリストはみ国を受けるために天の至聖所に移された。なぜ、時が延ばされているのだろうか？天父は、合法的にキリストに栄光を与えることを渋っておられるのであろうか？否、否である！王国の臣民たる神の民に原因がある。彼らは王国を受けようという熱意がないのである。メッセージに耳を傾けよう。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」と叫ぶみ使いの声！神の民は栄光を神に帰す時である。キリストが王国を受けることは、ただ、神の民の応答にかかっている。イエスの王国はダニエル書の利己心と強制で象徴される獣で象徴されない。イエスの王国の象徴は小羊である。

王国の世継ぎとなる者たち、残りの民は、この教会である！小羊は王国を持ちたいと今なお待っておられる。我々はその王国の臣民となるように召されている。もう時が延ばされてはならない。世界をあまねく見渡してみよう。混乱と困惑、すべてのものは崩壊寸前。バビロンは失敗した。ペルシャも失敗した。ローマも失敗した。中世時代の法王至上権は失敗したかのように見えた。しかし「その致命的な傷はほとんど完治しつつある。全世界が覇権を法王教に譲り、「新世界秩序」が近未来に成るであろう。しかし、預言者によると、それが失敗するという。ただ一つだけが残っている。王国と主権は真のイスラエルに戻されなければならない。今この時に、人となりたもうお方が天父の前に立っておられる。我々の鈍い感覚に現実を感じて欲しいと1世紀以上も待っておられる。我々のみがキリストの王国授与を遅らせているのだ。

異邦人の時が満ちているのに、神の民には国々の苦悩と叫びが聞こえないのだろうか？「イスラエルよ、聖所に行って主イエスに栄光を帰せよ」とみ使いは叫んでいる。「王なるそのお方に栄光あれ」と叫んで、民が一体となる時が来たのだ！

イエスが血を流し罪を負うために来られた時、神の民は彼を王としようとした。現代の神の民は、イエス

が王となることを望むと言いながら、なお聖所に彼を留めて血を流させ、自分たちの罪を負わせ続けている（初代文集 162、教育 311）。靈感の描写するこの事実と、教会のなまぬるい状態にある神の民の自己満足の状態はなんと表現したらいいだろう。

## セブンスデー・アドベンチスト共同体に大失望の影響

すべてのセブンスデー・アドベンチストは、1844年の大失望のことを知っている。実際は、2回の失望があった。アドベンチストは、最初は1844年の春にキリストの再臨を期待していた。預言の計算に6か月の誤りを見つけて、再臨を1844年の10月22日に期待した。イエスがエルサレム入場の時に弟子たちの期待は最高潮に達したように、1844年の「真夜中の叫び」における、アドベンチストの信仰と熱意は素晴らしいものであった。ペンテコステ以来かつてなかったほどのキリスト教の大運動であった。そこで第二回目の最も苦しい失望が訪れた。「大失望」である。

それ以来アドベンチスト共同体は失望から完全に癒やされることはなかった。1844年のあの熱意と信仰を回復することはできなかった。我々の教会は、いろいろな治療法を施したが、みな失敗した。時を定めること、リバイバル、異端、論争、分派、自給伝道機関、さまざまな教会成長プログラム、新しい説教者、後の雨の祈り、キリスト中心の説教、戸毎訪問運動、セレブレーション礼拝等々。あらゆることを試みたが大失望前のあの熱愛を取り戻すことはできなかった。

大失望は、我々の共同体に確実な損傷をもたらした。個人個人に人格があるように、教会、運動にもある。我々の運動が生まれたときにどれほどの深いダメージを受けただろうか。幼児の時の経験は大人になってもその後々の人格に深い影響を与えることが知られている。大人はそれを意識しないかもしれないが、その潜在意識の中に経験として埋もれていると言われている。

1844年に教会は、主の再臨を期待していた。それは最高の興奮に達した。大失望の経験は、教会の感情を深く傷つけた。その潜在意識にある更なる失望への恐れは花婿キリストに対する花嫁の応答に影響を及ぼしている。万物の終わりに関する確かな真理も、応答する能力を弱いものにした。

しかし、治療法はある！一つだけ。失望が自己中心的なものとして残っている限り、ラオデキヤ状態を変えるものは何もない。しかし、神の民が大祭司を凝視しているなら、大祭司に同情するようになる。1844年には、花婿は来る用意ができていなかった（大争闘下 140、初代文集 399）。神の民に神の道徳のみ像を完成するときのみ、聖所は清められる。聖所が清められるときのみ、彼は大祭司の服を脱いで王服に替えられる。それまでは、主は聖所の不義を負い続けなければならない（民 18:1）。神の民のすべての失敗、欠点、罪を天の聖所で負わなければならない。民の祈り、賛美、善行さえもキリストの義の香によって清められなければならない（1SM344）。彼の霊はなお民の罪によって傷つけられている。彼の心は、民が主の理想に到達できないために苦痛を感じておられる。民が罪を犯すたびに、主は新たに傷つけられる（希望中5）。

「全天はキリストと苦しみを共にしたが、しかしその苦悩はキリストが人性をとって現われたときに始まったのもなければ終わったのでもない。十字架は、罪が初めてあらわれたときから神の心に生じた苦痛を、われわれの鈍い感覚に示すものである。人が正しいことから離れるたびに、残酷な行ないをするたびに、人性が神の理想に到達できないたびに、神は悲しまれるのである」教育 311。

このように、靈感の書はキリストを天の聖所で傷つけられ、血を流しておられる小羊として描写している（初代文集 162）。イスラエルの民が傷つけたお方を見ると、彼らはひとり子のために嘆くように嘆く（ゼカリヤ 12:10）。

ある父親が道路で水道工事をしていた。自動車が普通に走っていた。するとかくれんぼ遊びをしていた子供が突然込み入った住宅街から道路に走り出てきた途端に自動車にはねられた。父親はびっくりしてその子供のところに走り寄った。なんと事故で血だらけになって死んでいたのは自分の子供であった。その時の父親の衝撃的な悲しみを私は目撃した。「わが子よ、わが子よ、どうして、どうして」と泣き暮れていた。

ダビデも反逆児であるアブサロムの死を知ったとき、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と心が破裂するような思いで泣き崩れた（サムエル下 18:33）。



自己満足のラオデキヤ教会に対するキリストの悲しみはどんなであろうか。1844年の大失望のために、涙にむせぶことはなくなるだろう。教会はついにキリストの失望に気づく時が来るであろう。キリストは、異邦人の時が満ちる時が来ると宣言された。ダビデの王位につく時に神の民は気づかなければならない。キリストご自身が王国を受け取る時が来たと言っておられる。天の至聖所ですたずたに引き裂かれ血を流しておられる小羊、罪を負ってとりなす大祭司の立場から解放されるのを彼は一世紀半も待ち続けてきた。我々の無知と盲目のゆえとは言え、なおゆるしたまえととりなしておられる。

ポイントはこれだ。わが教会は1844年の大失望を経験した。自己中心からキリストに目を向けることによってキリストの失望に同情できるようになる。それが共同体としてのわが教会を癒やし、「婚姻」の関係に入ることができるということである。

もし、この事実に覚醒しなければ、ラオデキヤの行き詰まりに解決はない。リバイバルの叫びの繰り返しの連続で、我々も子供達もこのままずっと荒野で葬られ続けるのであろうか。大失望の後のペテロのように「わたしは漁に行くのだ」とあきらめていいだろうか。

我々は教会の行く末を嘆いて泣いていいだろうか？ 6千年間も聖徒たちは葬られてきた。アドベンチストは4世代も葬式を続けてきた。いつまで再臨信徒の葬式は続くのだろうか？ ルター、ウエスレー、ミラー、その他の偉大な神の「巨人」たちに比べると我々は「いなご」のようなものである。墓に下されることで神につぶやきを言っているものだろうか？ 約束の地を見る特権を拒否されたモーセの運命を迎えるような状況に置かれても静かに摂理に身をゆだねる用意があるだろうか？ モーセは、ヨルダンを渡れずピスガの山で孤独のうちに召された。イスラエルの信仰の鈍さに、モーセは忍耐できず、しびれを切らせた。我々が荒野に骨を埋めて、花婿を迎える用意をする次の最後の世代が出現するだろうか？ もし、この世代のSDAが神の小羊の苦痛と悲しみに同情し、終わりを遂げることになるならば、「もう時がない」との奥義が成就し、キリストはダビデの王位につき、大祭司の服を王位に変え、王の王、主の主として来られるであろう。今、我々は厳粛なあがないの日に住んでいる。イエスのために聖所は清められ、正しい状態に回復されることを熱望しておられる。

## ダニエルの執り成しの祈り

ダニエルの執り成しの祈り（ダニエル9、10章）は、最後の世代の祈りである。ダニエルは、エルサレムと聖所のために祈っていた。70年間の終わりの時起ると預言されていたことのために。我々は、古代の回復は、2300年の終わりに起こる回復の型であることを見てきた。それ故、ダニエルの祈りは今日の神の民の祈りでなければならない。

ダニエルは、単に預言の通りに事が起こることに甘んじたのではなかった。神の約束は条件付きであることを知ったうえで、神の民に成就するように熱心に祈った。彼は、ただ「主ご自身のために」という根拠に基づいて祈ったのである。

「それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、**あなたご自身のために**、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。…主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。**あなたの町と、あなたの民は、み名をもつてとなえられている**からです」ダニ9:17,19。

ダニエル9、10章にその明確な結果を見ることが出来る。ダニエルが祈ったとき、エルサレムと聖所の回復のために神は助けを送られた。サタンは身震いした。彼は、この働きを妨害するためには、ダニエルの熱烈な執り成しの祈りを止めさせなければならなかった。歴史的にダニエルは、そのために獅子の穴に投げ込まれたことがダニエル6章に書いてある。祈る聖徒にサタンがやったことがこれであった。

### 新しい「異邦人の時」の考察：

異邦人の時はいつ満ちるのだろうか？ 今まで、我々SDAは、ダニエルと黙示録に出てくる「1260日」、「ひと時とふた時と半時」、「1年と2年と半年」「42か月」をみな、過去の中世時代の1260年間に適用してきた。しかし、最近の預言の研究で、これらは二重の適用があることが分かってきた。それらは、文脈によって解釈されなければならない。1日を1年と計算するか、字義通りの預言期間かは文脈によって解釈される。そして「歴史は繰り返す」ということも覚えていなければならない。確かに、過去にローマ法王教による迫害時代が1260年間続いた。しかし、法王教が1798年に

致命的な傷を受けたが、完治して、今度は全世界に支配の手を伸ばし、かつてないほどの大迫害が世界的に起こることが預言されている。「聖所の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは、42 か月の間この聖なる都を踏みじめるであろう」(黙 11:2)。

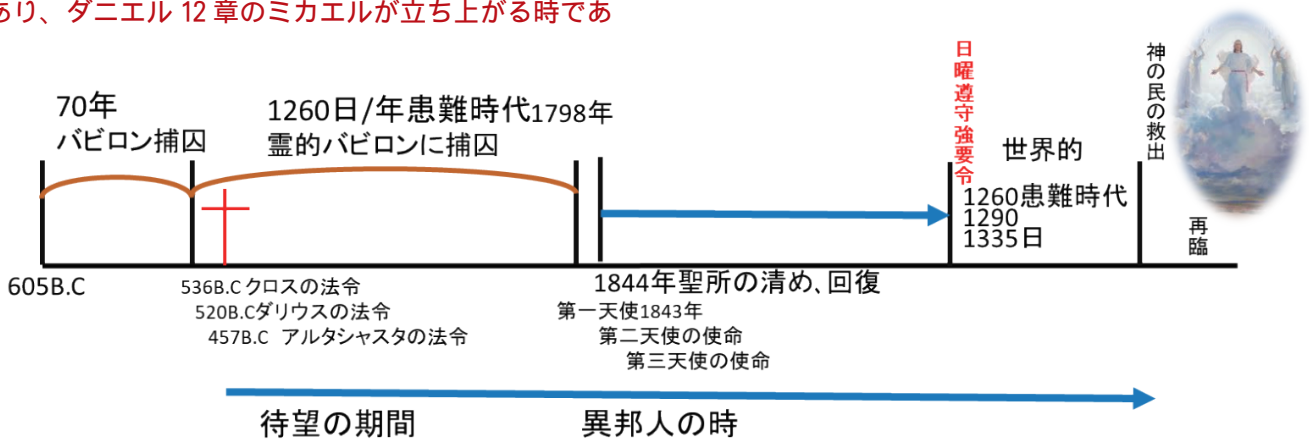
確かに、中世時代、1260年間、法王教によって神の民が迫害されてきたことは事実である。しかし、それはヨーロッパにおいてであり、ダニエル 12:7、黙示録 11:2の異邦人によって最後に、世界的に神の民が踏みじられ、迫害されることは近未来に起こることが分かってきた。それを信じる SDA の預言の研究者が出てきている。

今は迫害のない状態が続いている（迫害がないのは妥協しているからである大争闘上 42）。世界的に最後の**大迫害がローマ法王教を筆頭に、悪の勢力を結集して神の民（聖なる都）を踏みじる時が来る**。その時間は短い期間である。異邦人の時が終わり、神の民が永久に救出されるのは、黙示録 13章の世界的迫害があり、**ダニエル 12章のミカエルが立ち上がる時**であ

る（ダニエル 12:1-4 参照）。

ダニエルの精神が今日の神の民にみなぎるならば、すなわち、**イエスご自身のために**聖所の回復を祈るとき、彼らも同じ運命に会うであろう。黙示録 13章に記されている獣とその像のテストで、売ったり買ったりできなくなり、投獄され、殺されるという迫害が待ち受けている。

願わくは、ダニエルの、恵みと懇願の精神が今日の神の民に満たされるように。たとい、そのようなことがあっても、彼らには神の救出が約束されている。



インターネットでも  
ご覧になれます。

毎週の説教動画、セミナー等更新中。  
無料書籍も閲覧可能です。

サンライズミニストリー  検索

Online Sermons



facebook

Sunrise Ministry | Facebook  
<https://www.facebook.com/srsministry?ref=hl>

YouTube

Sunrise Ministry | Youtube Channel  
[https://www.youtube.com/channel/UC\\_MrvUh7GCW2yGpWmYNSGx4](https://www.youtube.com/channel/UC_MrvUh7GCW2yGpWmYNSGx4)



偶像王国、日本を告発する  
—日本人は実在の生ける神を知らない！

# 偶像 は 神 で は あ り ま せ ん

— 偶像は神を偽装するサタンの仮面または操り人形にすぎない —



及川吉四郎

## わが日本と偶像崇拜

この度、「日本の宗教心」の著者、及川吉四郎牧師は93才になられたが、「偶像は神ではありません」という本がまもなく出版される。日本国民に対するストレートなメッセージである。これは特に日本人に必読の書と言える。神道、仏教の研究に詳しい及川牧師の本からランダムに興味深いところだけ少し要約して紹介したい。

著者は、アダムアダムの墮落から、異教国、神の特選の民イスラエル、キリスト教、そして世界の終末の世界的な偶像礼拝と真の神との戦いまで触れている。実に人類史は偶像史と言えよう。著者は日本の偶像崇拜に焦点をあて、「偶像王国、偶像大国」に対する伝道の重荷を感じておられる。特に興味深いのが、日本の皇室にキリスト教環境が整えられて天皇にキリスト教を受け入れる絶好のチャンスがあったにもかかわらず、それを拒否し国家神道の国となった理由を説いておられることである。現人神天皇が「人間宣言」をしてもなお根強く日本国民のメンタリティーに偶像礼拝が残っている。八百万神（やおよろずのかみ）とか千五百万神（ちいおよろずのかみ）の神々の頂点に君臨している天皇の皇祖神とされる天照大神を祀る伊勢神宮の他にどれほどの神社が日本国にあるか、それぞれ何を祀っているか。

「結論的にはっきり言ってしまえば、日本人が信仰の対象とするものは、どうやら**死者の靈魂**、ということになりそうです。しかも、なかには**無機物**にも命があって、それを霊とする風習さえ見られます。**人形供養**や**針供養**などは、その顕著な例といえましょう。そんなわけで、日本の神社という神社の本尊は、おしなべて**人霊**なのです。

伊勢の皇太神宮は、皇祖神とされている天照大神、橿原神宮は神武天皇、石清水八幡宮は応神天皇、吉野神宮は後醍醐天皇、明治神宮は明治天皇、これらは天皇家の皇祖霊ですが、ほかにも臣下を祭った神社が無数にあります。楠正成・正行の湊川神社をはじめとして、織田信長の建勲神社、豊臣秀吉の豊国神社、徳川家康の東照宮、菅原道真の天満宮、維新以後の祭神としては東郷神社、乃木神社などなど、これらはみな人霊を神として祀った神社です。（例外もありません。四国の琴平神社はクンピーラ（鱈）が祭神とのこと。その他、龍神と称してへびを祀るものもある）。

一般庶民は先祖代々の祖霊を仏壇に祭って、「家内安全」と、その加護を祈っています。これも先祖霊を神としているわけです。

このように見てきますと、日本人が信仰の対象にし



伊勢神宮



明治神宮

ているものは、死者の霊であることはあまりにも明白です。

神と言えは皆ひとしくや思うらん

虫なるもあり鳥なるもある

もちろんその背景には、自然崇拝の対象としての太陽信仰があります。

しかし、**日本の最高神とされる天照大神**は太陽を擬人化した神なので、太陽の生命（エネルギー）を霊とし、これを人格化して、天皇家の皇祖霊としているわけですが、結局は靈魂が日本人に共通する崇敬尊信の対象とされているということになるわけです。

驚いたのは、天皇を神とする「国体（国家体制）」としたときに、日本国内ばかりでなく、海外にもどんな恐ろしいことがなされたのかということである。具体的ことが記されている。そして、戦時中のキリスト教に対する迫害がどんなものであったかを若い世代は知らなければならない。わが教会の先輩たちも重々経験してきた。二度と日本にはそんなことは起こらないと誰が言えるだろうか。「歴史は繰り返す」と言われる。過去を知らなければ、現代も、未来も知らない。

しかも、近未来に、日本で起こった大迫害が世界的に、かつてないほどの規模で起こることが確実な聖書の預言である。

日本の天皇崇拝と近未来に起こるローマ法王教崇拝を重ねると恐ろしい。最後の章「世界の終末と偶像崇拝」には、神の民に対する全能者の保護を記して希望を与えている。

## 皇室を取り巻く高官たちによるキリスト教の影響

終戦直後、天皇を取り巻く高官たちというのは、その多くがキリスト教であったという事実は、何を意味するのかということですが、それは、国全体が敗戦による自信喪失という大混乱の中であって、皇室を守るために、確固たる不動の信念を持つ信頼できる人というのは、キリスト教的信仰を持つ人以外に見当たらなかったということではなかったのか。その証拠に、戦後の日本の政治担当者として、ある筋から賀川豊彦氏に総理大臣の責務を負ってもらえないかとの内密の要請があったというはなしもあり、皇太子の家庭教師

としてキリスト教のバイニング夫人が招かれて、聖書を用いて英語教育が行なわれたという事実があって、これらのことは広く知られています。

なによりも、宮内庁長官が田島道治氏（新渡戸稲造氏の高弟）、侍従長が三谷隆信氏（内村鑑三の信仰の弟子）、東宮御教育参与が小泉信三氏（晩年キリスト教になる）、こういう人々に取り巻かれて育った皇族方が、キリスト教に親近感を持つようになったのは、極めて自然なことであったと思われます。

例えば、**秩父宮妃殿下**は、わが教団の経営する東宮衛生病院のある記念式典にご臨席くださり、（遺言→遺体は医学部に検体せよと。埋葬方法は火葬。葬式は無宗教形式）、**高松宮御夫妻**はわが教団の日本三育学院の教育に関心を持たれ、わざわざ参観にお見えになっていますが、その際、ホワイトの著書「教育」を進呈してもいます。（ICU 総裁「国際基督教大学」）

また、**三笠宮**は戦時中、北支をお巡りになっていたとき、中国の山奥で、白髪の老宣教師が農民相手に熱心に伝道している姿に感動し、その謎を解く意味で、戦後オリエント学に打ち込まれ、その結果、聖書考古学の学者として、東京女子大学で教鞭を執っておられたという事実もあります。（ヘブル語はべらべら）。



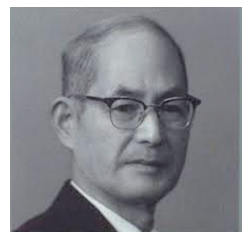
...

また、キリスト教会の元老格植村正久牧師の娘植村環女史（牧師）が訪米旅行から帰り、皇后に聖書を進呈していますが、その後、皇居では**毎週バイブル・クラス**が開かれ、出席者は皇女だけだったのが、間もなく皇后が出席するようになったこと、しかも天皇も三ヶ月に一度ぐらひは出席し、熱心に耳を傾けていたが、賛美歌は謳わなかったともいわれています。

天皇が、聖書の話に熱心に耳を傾けていた。ただ賛美歌だけは謳おうとしなかった、というこの事実は、何かいうにいわれぬ深い事情があるように、わたしには思われてなりません。聖書の話を書く、これはあくまで個人的なこと、しかし賛美歌をうたうことは、ある意味では信仰や思想の表明になるわけで、聞くことは聞くが、公的表明は避けるというお気持ちのあらわれととれないこともありません。

ところで、戦時中、戦争に反対の講演を行い、東大教授職を罷免された**矢内原忠雄氏**が、敗戦直後、

「余はさらに陛下のご英断によりわが皇室がキリストの福音を受





け容れ、国民に範を示し給わんことを祈り奉る」そして「ああ誰かわれらの尊崇敬愛措く能わざる今上陛下に、聖書を御進講申し上ぐる者は居ないか」と真心込めて語りかけておられます。

しかも、公開の講演で、最後に「わたしは訴えます。わたしは天皇に訴えます。陛下どうぞ聖書をお学び下さい。キリスト教の聖書の真理を学んで下さい」と嘆願哀訴しておられます。

この矢内原氏の祈りと訴えが、植村環女史（牧師）の皇居でのバイブル・クラスで叶えられ、実現したかに見えましたが、日本占領が正式に終了した1952年のある日、突然皇居でのバイブル・クラスは終わりを告げたといわれています。右翼の政治家が頭をもたげ、幅を利かせるようになり、宮中への監視や影響また干渉が強まっていったためかもしれません。

※戦後すぐに総理大臣になった東久邇宮<sup>ひがしくにのみや</sup> 稔彦王<sup>なるひこおう</sup>は、当時のキリスト教関係者を首相官邸に集め、「神道も仏教も敵を赦すということを教えてくれない。これから日本には、国民生活の基礎にイエス・キリストが必要である」と公式に宣言されたそうである。

以下の文章だけを紹介させていただきたい。

## 天 皇家一族がキリスト教から遠ざかった理由

それにしても、戦後暫くの間とはいえ、キリスト教の信仰を持つ多くの人材に囲まれ、聖書に触れる機会が多くあったのですから、皇族方のなかに、全員とは言わないまでも、何人かはクリスチャンになる人が出ておかしくないと思われるのに、たったの一人もクリスチャンになっていない。これはどうしたことなのでしょう。

そればかりか、教会の礼拝に姿を見せたという事実すらまったくくないというのは、異様な感じさえます。これはいったいなぜなのかということです。

これは、天皇家が何かに縛られているためとしか言いようがありません。それは何かと言えば、天皇が口にしたといわれる「天皇家は神道を守る責任があり、その立場にある」という一言に凝縮されているとあってよいでありましょう。

皇族方お一人お一人は、内心キリスト教に入りたくても、立場上それが許されない状態に置かれていると

いうことです。それは日本が神道の国であり、当然、天皇家の宗教もまた神道であるからなのです。

もちろんこれは、政治的制約によるのです。すなわち、天皇家の宗教が神道であるというのは、歴史的根拠は何もない。むしろ明治維新前は、天皇家の宗教は仏教であったのです。それが、徳川幕府の宗教政策によるキリシタン撲滅の手段として、国民全員がお寺の檀家に成るよう義務づけられ、お寺は幕府によって、民衆統治の役所代わりとされてしまったのでした。そのため、お寺は布教の必要がなくなり、もっぱら、戸籍の担当と葬儀を執り行うだけの存在となってしまったのです。

ところで維新政府は、新しい政治体制を敷くに当って、西洋に見習うことにしたものの、国民の精神的基軸となるものをキリスト教とするわけにもいかず、それに代わるものをいろいろ考えたすえ、これまでの仏教を排除して、日本土着の神道をもってきて、そこに据えることにし、同時にそれを天皇家の宗教として位置づけたのでした。その結果、神道の儀式的しきたりが、皇室典範におこまれてしまっているのです。

このことは、いいかえれば、戦後の日本国民には、信教の自由が与えられたにもかかわらず、日本の皇室にかぎり、信教の自由は与えられないまま、宗教に関しては、治外法権的な領域にされてしまっているわけなのです。

## 天 皇家には信教の自由がない

このように見てきますと、経済大国日本において、最も不幸で憐れまるべきは皇族、特に天皇家であるといわねばならないようです。なぜなら、天皇一族には信仰の自由がないからです。信仰の自由がないなら、外観は貴族でも、内実はおひな様にすぎず、もっとはつきりいえば、ロボット同様の存在にすぎないともいえますでしょう。

もちろんそれは、自ら選んでロボットになっているのではなく、政治権力が、国家体制が、有無を言わず、そのようにしてしまっているということなのです。天皇家はいわば囚われ人になっているのです。

われわれが、人間であるのは、自由意志があるからであって、それがなかったら動物の一種にすぎないものになってしまうわけです。その意味からすれば、日本の天皇一族は、金の檻の中に飼われている動物ということになりかねません。

ところで、わたしが偶像について述べるこの本に、あえて皇族のことを引っ張り出した理由は何か？それがいったい、偶像と何の関係があるのかと、いぶかる方があるかもしれません。しかし、ある方はすでに気づかれたにちがいないのですが、天皇を始め、皇族方は、天皇家の氏神である神道に縛られて、身動きならない状態におかれているわけです。すなわち、神道儀礼の伝統的しきたりに拘束されているのです。いわば、神道が手枷足枷となっているということなのです。

とくに、天皇は神道の最高神主かんぬしとされており、年中行事のほとんどが、神道の儀式によって占められています。その意味では、天皇は手枷足枷どころではない。首に鉄の輪を嵌められ、それが鎖で繋がれているようにさえ見えてしかたがありません。

このように、天皇家には自由がまったくなく、まるで神道の神々の人質となっているかのようです。

後に東大総長になられた矢内原忠雄氏が、「陛下よ、悔い改めて聖書を信じ、クリスチャンとなって国民に範を垂れて下さい」と、いくら哀訴しても、それは殆ど不可能といわねばならない状態にあるのです。

国家元首がこのような状態である以上、国民一人一人も、日本はもともとそういう国柄なんだと思込んでいるとしても、これまた仕方のないはなしということになるのかもしれませんが。

日本は長いこと、神の国を自称して、それを誇りとしてきたわけですが、しかし、その神の国は真の意味の神の国ではなく、じつは偶像という偽りの神の国であって、その偽りの神—偶像によって、真の神が隠されて見えなくなってしまうのです。

そのため、日本人のほとんどが、命の根源である、実在のまことの神を知らずにいます。たとい、知らせあげても、耳には入らず、まして、こころに容易に浸透していかないのが実情なのです。

その結果、日本国民全員が、まさに、偶像の国バビロンの捕囚の民となっている、といっても、それは決して過言ではないありさまとなっているのです。……

---

ローマ 1:20-23 「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝

もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。

人間崇拜は、日本に顕著に実行された。今度は、世界的に人間法王を強制的に法令をもって拝ませるということが聖書に預言されている。黙示録 13 章、17 章参照。

注意してみてください：

「わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであった。龍は自分の力と位と大なる権威とを、この獣に与えた。その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拜んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」 (13:2-4)。この獣は、ダニエル書 7 章に照らしてローマ法王教であることが分かる。さらに黙示録 13:11 からは、アメリカのことが預言されている。アメリカがローマ法王教の世界支配を助けることが次のように書いてある。

「そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拜ませた」13:12。さらに驚くべきことに謎の数字「6 6 6」は「人間を指す」と書いてある。

「ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は666である」13:18。

昔、アッシリアの首都、ニネベに預言者ヨナが遣わされた。王をはじめ、国民は創造主の前に悔い改め、滅亡から救われた。我が国、日本の天皇家に絶好のチャンスが訪れていたことを思うと残念でならない。しかし、創造主にして愛なる神は、きっと「人手によらず」ご自身の方法で日本人を覚醒させることでしょう。



# 過去において…

## 人間崇拜



日本・天皇崇拜



## 人間法王崇拜



ヨーロッパ・  
中世の暗黒時代



# 将来において…

## 数字「666」は「人間を指す」

黙示録 13:18

# 全世界



「この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」大争闘下 321。

## 秋セミナーのお知らせ

### テーマ：「神の残りの民への預言研究！」

#### 内容：

- ・ヘブルの祭りから終末事件を考察
- ・黙示録 17 章の大淫婦と獣、黙示録 17 章、13 章の「獣の 7 つの頭」、
- ・ダニエル書、黙示録の「10 の角」、
- ・新世界秩序—今我々はどこの地点にいるか、
- ・聖書から日曜問題を考える、マタイ、ダニエル、黙示録、
- ・エレン・ホワイトと預言—更なる深い理解、
- ・神の週の大時計、ダニエル 8 章と 12 章、144,000 の準備！
- ・黙示録 14 章、第二天使と第四天使—バビロンとは？ など

「これ以上真理が示されないとか、我々の聖書の説明には誤りがないという立場をとって言い訳を誰もしてはならない。ある教理が長年我が民によって真理として保持されてきた事実は、我々の考えが誤りのないもの（無謬）であるという証拠にはならない」レビュー・アンド・ヘラルド 1892 年 12 月 20 日。

「我々は、現在我々が知っている以上に知らなければならない... この地上歴史の終わりに近づく時、もっとすばらしいことを表し示されるであろう... 神の言葉の研究—特に最後の時代に関連した預言の研究—にその能力をささげる者たちは、重要な真理の発見によって報いられるであろう」MS 75、1899。

**日時： 2018 年 11 月 14 日（水）Pm6：00～**

**11 月 18 日（日）までの 5 日間**

**場所： サンライズミニストリー**

#### 宿泊に関して：

サンライズミニストリーの宿泊施設には数に限りがございます。宿泊希望なされる方はお早めにご連絡ください。また定員に達した場合には周辺の宿泊施設をご予約ご利用ください。

**講師： フランクリン .S. ファウラー M.D. 内科医**

ローマリンダ医科大学、公衆衛生助教授を引退して 25 年間、特にダニエル、黙示録研究に没頭。Prophetic Research Initiative(研究所)の主幹、20 冊以上の著者がある。「もう時はない」(黙示録 10:6)との終末的なメッセージを発信している。





## 創刊号 1988年2月発行

アンカーに寄せて/自分で調べよ!/委ねられている使命

## 第2号 1988年8月発行

「完全」に対する不信/信徒からの声/人の性質/古代イスラエルと現代イスラエル/神の信仰/TV-現代の怪物/信仰から学ぶ教訓/重要でないことと重要なこと

## 第3号 1988年12月発行

1888年-勝利が敗北か?/信仰から学ぶ教訓/アンカー堅固な土台/人の能力と才能/完全な品性に関する質問と反対/皆様に研究していただきたい宿題

## 第4号 1989年4月発行

キリストの性質/信仰から学ぶ教訓/人の創造/レビ記にみる三天使の福音/イエスの品性の美しさを仰ぎ見る/1888年のメッセージとは何か

## 第5号 1990年3月発行

キリストの性質/信仰から学ぶ教訓/真理の宝石/瞑想/証の書の誤訳・通訳/最も重要な働き-親業/時兆/経済大恐慌は来るか?/後の雨が今降っている?

## 第6号 1990年10月発行

最後のあがないの働き-理解の重要性/聖所としての人間/ピリ-グラハムと法王教/クリスチャンと努力:真理の宝石/サムソン-SDAに何を教える?/質問:バプテスマ-人数増加について/小食-過食-エジソン

## 第7号 1991年1月発行

選民を感嘆さんと/ジニオン・ソートロン「夢と幻」/偽りの預言者、心の黙示/バプテスマのヨハネとヘロデ

## 第8号 1991年6月発行

アドベンチストの最重要教理/破壊せよ、その基までも/再臨信仰を破壊する企て/生ける者のさばき/ダニエル11章-「新しい世界秩序」への激動/オーバス・デー-ローマ法王教のマフィア

## 第9号 1991年10月発行

イエスあるがままの真理/しかし、暖かな愛、喜び、平和はなかった/ダニエル11:40-45の研究/激動の嵐-最後の戦い/宗教パワーと世界政治

## 第12号 1992年2月発行

セブンスデーアドベンチストと踊り/信仰と行い/最後の戦いダニエル11:40-/宗教パワーの台頭/多教派を真似る

## 第13号

預言の書-雅歌の研究の重要性/キリストの先在/宝石、装飾品類/研究-ダニエル書11:40-/ヨーロッパ統合は成るか?/質問1ペテロ3:18-22

## 第14号

変革時代のアドベンチズム/アドベンチズム(再臨運動)の変化/異新婚委員会への反論/ユダヤ人はなぜイエスをメシヤとして拒んだか?/連載ダニエル11:40-「終わりの時」

## 第15号 1994年12月発行

特集-聖書翻訳の流れ、どの聖書を選ばよいか?/別冊:新共同訳に対する意見書

## 第16号 1995年6月発行

連発する諸事件の意味/ヨシヤ記のポイント/聖書に対する闘争

## 第17号 1996年5月発行

新共同訳は「より良い聖書」か?

## 第18号 1996年8月発行

各時代のカインとアベル/預言の霊より参考引用文

## 第19号

パチカンが進化論認める-その意味/SDAにおける進化論の流行、風靡-その意味/6000年の地上歴史/背教のアルファとオメガ/「1888年のメッセージ-信仰による義認」グアム島セミナーに参加して

## 第20号

迫りくる戦い/敵を知る/時を知る/備えを知る

## 第21号

天路歷程最終の道標/キリスト再臨接近のしるし/ダニエル書研究の重要性マリアン・ベリー/ダニエル12章の警告マリアン・ベリー

## 第22号

賢い者は悟るでしょう/タイムライン(時刻表)はどのように始まり終わるか?

## 第23号

アドベント(再臨)への待望は大失望になり得る!/紀元二千年コンピューター問題とクリスチャン品性の完成/法王、日曜休業令のための舞台装置をする!/ライ病人村

## 第24号

警告無視の悲惨/ダニエル12章に関する議論/世界総会聖書研究所の論評に対するマリアン・ベリーの返答/1999年第1期の日本語安息日学校教訓について/読者からの便り

## 第25号

西暦2000年を迎えるにあたって/クリスマスに思う/確かな天声-預言の声-/真理の宝石

## 第26号

待望の聖書「スタディバイブル」/人間の像/二つの冠

## 第27号 2000年12月発行

クリスチャン品性の完成を信じる者は完全主義者か?/ローマ・カトリックは変わったか?

## 第28号 2002年3月発行

星(ひかり)に導かれて/ニューヨークテロ事件で見た恐怖と希望/鳥かごとイエスのあがない/証

## 第29号 2002年12月発行

注目されるオリオン星座/上を見上げなさい/十字架を掲げよ!/アザゼルのやぎ/ふたたび神の宮となるために

## 第30号 2003年4月発行

紅海横断の真実-考古学が明かす驚くべき発見!/世界を湧かせる映画「ハリポッター」大衆を魅惑する現代心霊術!/たた師匠を見つめて/イエスを仰ぎつつ

## 第31号 2003年9月発行

どれが本当のシナイ山か?/隠れた世界最大のテロ集団とは?/なぜ、私はセブンスデーアドベンチスト改革教会に加わらないか?

## 第32号 2004年1月発行

灰の都市、ソドム・ゴモラの発見!/真の医事伝道に生きて(自然療法)/ついに動き出したアメリカ-国主義-20ドル紙幣の真相?

## 第33号 2004年8月発行

おとずれの時を知る/小さな光と大きな光の意味/世界貿易センターの襲撃-その歴史は動いた/イエズス会の狙い

## 第34号 2005年2月発行

海と大波のとどろき/小さな光と大きな光2部/礼拝と音楽/暗黒の勢力を打破する

## 第35号 2005年6月発行

新法王選出の意味/神の大時計/預言の研究と信仰/悪霊との戦い

## 第36号 2005年12月発行

終末のしるしの急カーブ/十字架の勝利/品性の耐震強度/法王制の最終時代/黙示録の研究で覚えるべき重要なポイント

## 第37号 2006年6月発行

米国「十戒デー」祝典の意味/預言の霊は現代医学の100年も先端を行く/新共同訳についての世界総会とのやり取り-そのいきさつ/バイナッブル・ストーリー

## 第38号 2006年12月発行

イエスを見失ったSDA?見ざる、聞かざる、言わざる大真理/神の居住地-宣教師の散々の試練/証-翻って生きよ

## 第39号 2007年6月発行

聖書における女Part1/キリスト再臨の時を探る/罪はどのように処理されるのか?/小石の波紋

## 第40号 2008年6月発行

デジタル社会の再臨信仰/ああ、恵み、我にささえべり/神様の学校-権力の放棄パート2/マザー・テレサ40年間の信仰の危機

## 第41号 2008年12月発行

メガチャーチ(巨大教会)についての考察/天下分け目の大決戦1/七つの封印/王家の紋章

## 第42号 2009年1月発行

アメリカに変化「日の出」の時が来たか?/マイ5章48節-完全について/古代エジプト史におけるヨセフ

## 第43号 2009年6月発行

創造主の一大傑作-人間/世界総会におけるピアソン総理の最後の辞/ゴスペルという名の策略/イエズス会の日本戦略/エディ婦人とジャックじいさん

## 第44号 2010年1月発行

荒らす憎むべきもの/「各時代の争闘」にあっばれ!/オバマ大統領と法王ベネディクト16世の会見の意味/賢者への言葉/背教のオメガ

## 第45号 2010年7月発行

世界を操る真の黒幕/我が波乱万丈の人生/大いなる像とは何か?/2010年春のセミナー報告/私のチルダイを吹き飛ばして下さった神様

## 第46号 2011年1月発行

世界支配を狙う二大勢力/「終わりの時」の諸事件/セブンスデーアドベンチストの存在理由-最後の贖い-/聖なる御言葉の歴史と移行/ケロウ博士の歴史「背教のアルファ」

## 第47号 2011年7月発行

立ち返れ日本!創造主に!東日本大震災?頻発する災害の意味!/「キリストとサタンの大争闘」のお薦め/贖罪の犠牲と全能の仲保者の働き!/論点/「春の祈禱週読み物(2011年)」を読んで感じたこと/黙示録の研究7つのラッパ/ジェレミーとラバたち/銀細工師の物

## 第48号 2011年12月発行

クリスマスの由来異教からカトリックへ、そして全世界へ/新興教会(エマージング・チャーチ)と霊性形成(スピリチュアル・フォーメーション)/さまざまな教会成長論の波/経済危機/意志?我々の選択、神の力/東日本の石が叫ぶ!大震災から学ぶ

## 第49号 2012年8月発行

近年の驚くべき考古学的発見!/信仰によって進む/信仰による義認と三天使の使命-第一部-一つの石もほかの石の上に残されず/あしあと/他

## 第50号 2013年1月発行

グローバリズム/人の子の時に同様なことが起こるであろう/真の清め/三天使の使命-第二部-罪深き独立

## 第51号 2013年7月発行

時のしるし/新ローマ法王選出-大秦景教流行中国碑の真実/本能寺の変とイエズス会/日本人がキリスト教を受け入れにくくなった原因/我々の大祭司、諸王の王「イエス・キリスト」を仰げ!/当面している危機/平和をもたらす道/驚くべく、くすしく創られた/神の愛によるいやし

## 第52号 2014年1月発行

聖書の預言とニュース/アメリカの常識の変貌/終末の前兆-預言のアウトライン/生ける者のさばきと後の雨の関係/主の幕屋の中へ/勝ち誇る真理

## 第53号 2014年8月発行

驚くべき預言の成就/罪の除去/愛なる神の罪の処理のしかた/船は無事に目的地に着くか?/ビル・ヒューズ牧師による講演のダイジェスト

## 第54号 2015年1月発行

大医師イエス/聖書から見るエジプト考古学/終わりの時はいつ来るのか?/増し加わる光

## 第55号 2015年8月発行

立ち上がるトマス/エレン・ホワイトとヨハネ/E.G. ホワイトとは誰か?/イスラムとカトリックのつながり/女性接手礼/個性の発達

## 第56号 2016年1月発行

第二次世界大戦/第三次世界大戦が始まった!/?底いも知らぬ人の罪/御業完成の鍵/後の雨/大いなる叫びに含まれる経験/創造主の傑作 恐竜!!

## 第57号 2016年7月発行

地震災害は何を意味するか?/巡礼者たちの煩悶/完全論へのつまずき/日本三文豪の煩悶

## 第58号 2017年1月発行

トランプ米大統領誕生の意味/取り戻そう!健康長寿 沖繩/歩く運動の効用/つむじ風を刈り取る/讃美歌に見る「霊魂不滅思想」

## 第59号 2017年8月発行

良心の自由の危機か/ネルソンの貢献-日本国憲法/ジグソーパズルから学ぶ教訓/アドベンチズムの動揺

## 第60号 2018年1月発行

宗教改革500周年/信仰による義認/キリストは神か人か/セブンスデーアドベンチストの中にも異教礼拝様式の侵入/サンライズミニストリーの働き

## サンライズミニストリーについて

好評を頂いております。その他、聖書に導く書物、日常生活や健康に関する書物、賛美歌CD/DVDを発行しております。混迷する世界情勢の中で、私達は確かな光を必要としています。聖書の預言の光だけが私達に希望を与えます。「主とその恵みの言葉」に錨を下ろして最後の時代を生き残り、主イエスの再臨に備えましょう。また無料小冊子も多数配布しております。

サンライズミニストリーは、沖縄県今帰仁村に位置し、書籍やメディア、セミナー等を通して現代の私たちに必要な使命を伝えるキリスト教伝道機関です。当機関では、永遠の福音社-EGPA(韓国)を通じて2000年に「スタディバイブル日本語版」を発行し、CD/DVDを発行しております。混迷する世界情勢の中で、私達は確かな光を必要としています。聖書の預言の光だけが私達に希望を与えます。「主とその恵みの言葉」に錨を下ろして最後の時代を生き残り、主イエスの再臨に備えましょう。また無料小冊子も多数配布しております。



書籍案内



## 歴史と聖書の預言

各時代の大争闘 E・G・ホワイト

1冊で 950円/冊  
10冊以上で 850円/冊  
50冊以上で 650円/冊  
100冊以上で 500円/冊

商品番号:B20-4 A5サイズ

「各時代の争闘」の再版で、カラーの写真、絵入りの、読みやすい新しいレイアウトです。現代の真理の書籍中、最も重要なこの本に至るところで秋の木の葉のように散らしましょう。あらゆる欺瞞の中にある現代人に正しい識別力を与え真の希望を与える必読の書。



## 私の聖書が一番！

こどものための聖書研究ガイド 第10巻

500円

商品番号:B42-15 A4サイズ、100頁

小学生からのこども向け聖書研究ガイド。



## 私の聖書が一番！

こどものための聖書研究ガイド 第11巻

500円

商品番号:B42-16 A4サイズ、93頁

小学生からのこども向け聖書研究ガイド。



## 土の器に盛られた尊い宝

弥永邦昭

500円

商品番号:B50-18 A5サイズ

著者の体験を綴った本。聖書翻訳改ざんの謎ープロテスタント最後の砦である再臨信仰の土台を突き崩す新共同訳聖書。

## 讃美歌集&CD 契約の虹

讃美歌 160選



商品番号:B70-1 A5サイズ、歌集 1,600円  
:C70-1 CD8枚組 4,000円  
:BC70-1 歌集&CDセット 5,000円

日本基督教団讃美歌、聖歌、リバイバル聖歌、他から160曲を選びました。音程が高い調は低くして歌いやすくしています。全160曲を収録した音楽CDもあります。



## 日本人の宗教心ー何が信仰の対象か

及川 吉四郎

1,500円

商品番号:B13-3 A5サイズ

日本人は多民族、宗教も多宗教、「ごっちゃませ宗教」「チャンポン神」と著者は言うはばかりません。日本の神道、仏教がいかに変容して来たかに特にメスを入れ、聖書の絶対唯一、創造神に立ち返る以外に救いはないと著者は訴えています。



## 現代の真理

500円

商品番号:B41-1 A5サイズ、168頁

現代の真理

この本を正しく研究するなら、再臨信徒の困惑を整理し、魂の飢えを満たす。終末事件の研究から、今がその時であることを知る。さまざまな教理の風に吹きまわされないために、正しく理解する必要がある。

## まんが聖書大旅行

9月入荷予定!

デイビット・キム

史実にもとづく資料を取り入れた聖書物語まんが。12巻セット。オールカラープリント



11,760円

商品番号:B42-28 A5サイズ、12巻セット

SUNRISE MINISTRY キリスト教伝道機関  
サンライズ ミニストリー刊行誌

〒905-0428  
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471  
E-mail: contact@srministry.com  
郵便振込番号: 02080-0-12121  
サンライズミニストリー

www.srministry.com  
TEL (0980) 56-2783  
FAX (0980) 56-2881

Anchor

アンカーNo.61  
発行人 金城 重博